MUV-LUV ALTERNATIVE5（改）

ポンポコ狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＵＶ－ＬＵＶ　ＡＬＴＥＲＮＡＴＩＶＥ５（改）

【Ｎコード】
Ｎ４２７７Ｐ

【作者名】
ポンポコ狸

【あらすじ】
ＭＵＶ－ＬＵＶ　ＡＬＴＥＲＮＡＴＩＶＥに、宇宙移民に忌避感を持たない人間が来訪したらどうなるのか。
本来有り得たかも知れない道を外れた、未来はどこへ行くのか？

プロローグ

突然ですが、転生しました。

しかも、複数回もロボットアニメの世界を彷徨っています。

それも、リアル系の物ばかり。

要するに、シリアス１００％・御都合主義絶無・ハッピーエンド無し・超現実主義の、人と人の殺し合いの人生の連続です。

何が原因で、こんな事に成ったのかな？

積重なって行くのは、知識と経験・記憶と思い出・後悔と絶望、

そして人を殺し続けて真っ赤を通り越してドス黒く染まった手。

夢なら覚めてくれと何度思ったことか・・・。

記憶に残っている最初の人生は、何処にでも居るであろう極々平凡な大学生でした。

大学４年で卒業単位習得済み・就職内定済み・卒業研究発表を残すのみと成った、暇な時間が大いに存在する何処にでも居る大学生です。

まあ暇な時間を、リアルロボットアニメのマラソン鑑賞で潰す程度にはオタクでしたが。

転機を迎えたのは、卒研発表の前日です。

明日が発表と言う事も有り、気分転換がてらに愛車で近くの山間部を昼間からドライブしていました。

大学４年で走り慣れた道を、何時もの様に何時も通りに走行して。

異変が起きたのは、谷沿いの５連続ヘアピンカーブの半分を過ぎたところです。

どっかの馬鹿が、タイムアタックの様な速度で道幅一杯にドリフトしながら突っ込んで来ました。

衝突回避の為に、咄嗟に互いが反対方向にハンドルを切って正面衝突は回避しました。

その代わり、クルマごと谷底に向かってダイブしましたけど。

アンニャろうが、今度有ったら戦場仕込みの拷問術をフルコースで喰らわせてやる。

まぁ、そんなこんなで、それ以降は色んなロボットアニメの世界を旅しています。

大概が裏方の裏方、俗に言うシャドウワークス専門で。

何故か、原作主役組みとは滅多に顔合わせした事無いけどね。

因みに前回の世界は、マクロスF。

グレース女史の元、ＶＦ－２７γに乗ってギャラクシー側に付き、フロンティア勢に攻撃を加えていました。

サイボーグ体は初めてでしたけど、高性能かつ便利な反面、メンテナンスが偉く大変でした。

そうそう、パイロットや工作員としての腕は今までの技術や経験があるので超一流でしたよ。

お陰で、捨て駒には成らなくてすみました。

一緒にガリア４に来いとか言われた時は・・・終わった・・・とか思っちゃいましたよ。

最終決戦の時はバジュラクイーンと合体した、グレース女史の護衛に回りました。

結果はご存知のとおり、こっちの負け。

原作で、アルト中尉とブレラ少佐がコンビで突撃して無双するシーンが有りましたよね？

あの中の一機が、自分です。

まぁ、そんなこんなでマクロスF世界をログアウトしました。

ログアウトした筈なんですけどね。

「何でまだ、サイボーグ体でＶＦ－２７γに乗ってるのかな自分？」

しかも、ＶＦ－２７用試作デストロイドパック・対艦用大型反応弾・大型フォールド爆弾・スーパーフォールドブースター。

何、この超重装備。

星でも消滅させる気か？

マジで出来るぞ。

「それに、個々何処の世界だよ。　マクロス世界な訳無いよな？あそこに見える地球っぽい惑星は、無防備過ぎるしな」

それに今までの転生は、赤ん坊の段階から始まって、前の世界の身体や装備の引き継ぎは一切無しがデフォルトだったのに。

・・・マジ、どう言う事なんよ？

第一話　この先どうしよう？（前書き）

お久しぶりです。
リアルが忙しく、執筆に時間が取れない時期が続いていました。
不定期更新になると思いますが、完結目指して頑張りますので改めてよろしくお願いします。
長期間放置していたので、プロローグ以外は改定して進めようと思います。
基本方針は変えないつもりです。

第一話　この先どうしよう？

取り合えず、地球の周りをステルスモードで周回しつつ地表及び太陽系内を索敵していると、とある事実が判明。
何か、気色の悪い生物が集団で地表を走破しながら、デストロイドっぽい人型兵器と戦闘をしていました。

「・・・ここ・・・Ｍｕｖ－Ｌｕｖ・・・かな？」

つい、口からポロリと声が漏れました。
いや、まぁ、あれですよ？
人間同士が表立って戦争してる所よりはマシですけど、何で双方殲滅戦を展開している世界なのかな？
あれですか、見えない何かに嫌われてるんですかね、俺？
特に悪い事をした覚えは・・・うん、何でも無いですよ？

あれは仕事でしたことですし、あっちは勅命でしたし・・・。

「取り合えず、この先どうすっかな・・・？」

進入したネットワークを調べた結果、今は１９８０年1月だそうだ。

まあ、時系列が分かった所でどうしようもない事なんだが。

Ｍｕｖ－Ｌｕｖの大筋は何と無く覚えているが、詳細は忘れてしまったしね。

たしか、２０００年前後が本編として描かれていたと記憶している。

「地球のＢＥＴＡを殲滅するだけなら、特に難しい事は無いと思うんだけど地球に穴が開くかな？」

マイクロミサイル型小型反応弾が１００発以上、対艦大型反応弾が２発、ＤＥ弾（ディメンジョン・イーター）が２発、地球ごと殲滅する事も出来る火力だ。

Ｈ１（ハイブ１）以外を潰した後に、集結したＢＥＴＡを纏めてＤＥ弾で消し飛ばせば大丈夫かなと思うのだが、確実に地球に穴が開く・・・と言うか、地球が抉れる。

機体に搭載されているＤＥ弾の効果範囲は約１００００Ｋｍ、ガリア４でグレース女史が使用したものと同じものである。

「それに、この体の維持も考えないと」

インプラント技術により強化されたこの身体は、定期的に専門のメンテナンスを受けなければ、フルパフォーマンスを発揮するのは極めて困難。

基本的にインプラントボディはメンテナンスフリーなのだが、それはあくまでも民生品を極一般的な使用範囲内で使用しての事だ。

戦闘目的の機装強化兵では、各部パーツの設計耐久限界を超える事例が間々ある為、一戦後毎には精密測定を行っている。

その上、自身の身体を構成しているパーツ群は、ＶＦ－２７γの性能をフルに発揮する為にフォールドクォーツ系物質が使用され強化した特別製。

この時代の技術力では、交換部品の再生産は極めて困難である。

「やっぱり、この世界でも結局はシャドウワークスか」

まともな方法では、この世界で生きていく事は不可能だろう。

ならば、まともでない方法で、生き抜くしかない。

幸か不幸か、この世界は地球外起源生物と戦争状態にあり、人類側は押されている。

更に、この敵性地球外起源生物は、ゼントラーディー軍やバジュ

ラ程の圧倒的な戦力は持っていない。
その上、地球人類側の勢力に統一勢力は無く、個別の勢力が内ゲバで対立していると言う有様。

「付け込む隙は幾らでもあるな・・・」

どこかの勢力に肩入れし、自身の持つ技術を部分開放する。
自身の持つ技術群は、此処の地球を襲っている地球外起源生物とは比べ物にならない程強大な敵と戦って培われて来た物。
再現性の難しくない技術でも、十分に強力な物を作る事は可能になる。

「放出する技術レベルを調整すれば、戦争を長引かせる事も可能だな」

又、戦争は技術発展を加速させる。
更に戦争、特に双方共に殲滅戦とは人的資源を極端に消費する。
そうなると、戦闘により身体損傷で優秀な兵士が戦線離脱する事は、大いに忌避すべき事態でもある。
そこに、本物と同等或いはそれ以上の性能を持った義肢や人工臓器が製造出来る様になったらどうだろう？
おそらく、民需軍需問わずに需要は発生するだろう。

技術の発展は人が必要と望むからこそ、発展するものだから。
時間は掛かれど、いずれは自身の欲する部品も製造可能になるであろう。
そうする為にも、既存の擬態技術の方向性が自身の身体に使われているインプラント技術に辿り着く様に、基礎技術理論を公表し誘導する必要はある。

「あとは、何処の勢力に肩入れするかなんだけど・・・ま、言うまでも無いか」

提供する技術を最低限“使えるレベル”に持っていける勢力。
提供する技術を“大量に量産出来る”勢力。
提供する技術を“合理的に使える”勢力。
詰まる所、それらの条件に合致する勢力は・・・。

「・・・アメリカだけだな」

領土を侵略されておらず、一定水準以上の技術力を持ち、感情論より合理性を優先させる国柄。
両者の利益を追求するパートナーとしては、合格ラインにある。

「取り合えず・・・　・・・生き抜く事を最優先で頑張りますか」

第二話　隠れん坊は得意かな？（前書き）

お久しぶりです。
短いですが、第二話投稿です。

第二話　隠れん坊は得意かな？

取り合えずこの先の基本方針が決まり、地球に下りようと思うのだが・・・。
一つ問題が発生した。

「・・・どうやって地球に降りよう？」

マクロス世界の地球に比べたら貧弱極まりない防衛ラインだが、この地球にも宇宙から飛来する物体を補足迎撃する防衛網が張られている。
尤も、ＶＦ－２７γのアクティブ・ステルス（ＡＳ）やビジュアル・ステルス（ＶＳ）を使用すれば、光学的・電子的に姿を消せるが、流石に大気圏突入時には偽装も荒くなり完璧に誤魔化す事は難しい。
まず大丈夫だと思うが、不安材料は極力排除したい。

「現状選択できる、突入方法は３つかな？」

1：ファイター形態で大気圏突入。
2：ガウォーク形態で逆噴射減速をしつつ大気圏突入。
3：フォールドブースターを使用して、大気圏内へ直接フォールド。

この3つが、現状での選択肢である。
それぞれの、利点と欠点は。

利点
1：突入時間の短縮。
2：突入時の大気摩擦が発生せず、隠匿性が高い。
3：直接大気圏内へ進入する為、大気圏突入プロセス事態が発生しない。

欠点
1：高速で大気圏突入する為、断熱空気圧縮による空気加熱で、大気がプラズマ化し機体周囲が明るく輝いてしまい、ＡＣ・ＶＳを使用しても隠匿性が極端に低下する。
2：減速に長い時間かかり、大気圏上層を長距離移動するので、相手の索敵能力次第では発見される可能性がある。
3：フールドブースターの使用限度回数が減る。

考査
1：最悪、大気圏突入中に不審落下物として攻撃衛星の核弾頭によって迎撃される可能性がある。
2：現地球側の索敵能力を考慮すると、ＶＦ－２７γが捕捉される可能性はほぼ0。
3：手持ちの切り札の一枚を劣化させる必要性はない。

結論としては・・・。

「ガウォーク形態で、ＡＳ・ＶＳを併用しつつ降下するのがベストかな？」

あとは、突入コースの選定。
ハイブ周辺を避けつつ、人目があまり無い場所・・・。

「南極圏に降下して、北上するか」

不幸中の幸いにも今の人類の目は、月や火星等の外宇宙・地表・地下に集中している。
これは、新たな着陸ユニットの襲来や新規ハイブ建造や地中侵攻の警戒に力を入れた結果である。
また、レーザー種が登場した事により航空攻撃が不可能に成った事も大きく響いている。

そして降下予定地点の、南極圏はいまだ本格的な調査や開発が行われていない事も大きい。
一年中ブリザードが吹き荒れる気候も好都合である。
万一降下の足跡を捕捉されても、現地調査はほぼ不可能かつ痕跡

もブリザードが全てを覆い隠してくれる。
通常の航空機では飛行不可能な天候であっても、ＶＦ－２７γには些かの問題にも成り得ない。

「それじゃあ、降下する前に外装パーツとフォールドブースターを隠しておくかな」

流石に地表での拠点を確保していない状態で、反応弾やＦＢを持ち込むのは危険だと判断し、静止衛星軌道上を周回している手頃な小惑星を見繕いパーツを隠した。
降下自体はフル装備でも可能なのだが、装備品の管理が難しい。
万一暴発でもしたら、目も当てられない状況になる。

「降下準備完了。　周辺宙域クリア。　ＡＳ・ＶＳ正常作動。
降下軌道クリア。　・・・降下開始」

ガウォーク形態に可変し、大気圏降下を開始した。
減速は予定通りに巧くいき、大気のプラズマ化は発生していない。
このまま順調に行けば、あと数分で降下を完了するだろう。

「あっ・・・南極って事は、ペンギン見れるかな？」

第三話　何事も土台が重要（前書き）

前回から大分遅れて申し訳ない。

気分転換に、“未来人の異世界漫遊記.ｉｎＩＳ”と言う作品を書き始めました。

其方の方もどうぞ見て見て下さい。

第三話　何事も土台が重要

無事、地球各勢力に見つかる事無く大気圏降下に成功。
降下地点は予想通りのブリザード。
視界はほぼゼロ。
この状況では、通常の航空機では何処を飛行しているのか分からずに墜落してしまうであろう。
もっとも、ＶＦ－２７γならほとんど問題には成らない。
衛星軌道上に隠した大型複合センサーアンテナパーツとのデータリンクにより、現在位置等の情報は得ているので特に問題は無い。

暫くブリザードの中を飛行すると、南極大陸を抜け南太平洋上に到達。

久しぶりに見る、有人惑星の海。
人工物でない本物の海。
見渡す限りの青い海。

何万光年と旅をする宇宙移民にとって、この海がいかに貴重な物かは実感として知っている。

それだけに残念に思う。
簡易計測の結果、大気中の放射能物質含有量がデータベースに残る星間戦争前のマクロス世界の地球（以降M地球）に比べて、かなり高レベルで検出できた。
即座にどうにか成ると言う訳ではないが、このまま放置すれば生態系にかなりの影響が出る。
一度完全に生態系が全滅したM地球を知る身としては、残念極まりない。

「まぁ・・・今の段階ならまだ、手のうちようはあるかな」

幸か不幸か、ＶＦ－２７γのデータベースには、様々な技術データが圧縮保存されている。
民間から軍事、仕事上知りえた研究室レベルの最新技術など色々ある。
勿論、半世紀ほど昔に使用された技術の製造法から運用方法も。

そう、『地球大気浄化作戦』に使用された各種化学反応剤のデータを。

「カナダの半分を汚染した米国なら、ノドから手が出るほど欲しい技術だろうな」

五大湖周辺の工業力の復活及び全力稼動。
生存不可能圏内の資源採掘再開。
長期的な汚染の解消。
その上、焦土作戦を展開しているユーラシア各国には極めて強力な外交手段にもなる。

「もっとも、手札を早々に明かす気はないけどな」

それに正体不明の人間が持ち込んできた、海の物とも山の物とつかない怪しい化学薬品を即座に散布するとは考えられない。
暫くは細々と活動しつつ、社会的信用もしくは技術的信頼を得る必要があるな。

「あれが、フロリダ半島かな？　レーダー反応、付近に艦船航空機の機影無し　闇夜に紛れるのが得策だな」

目視圏にアメリカ本土が映った。
日が傾き夕焼け空に成っているので、もう少し時間を置いてから上陸する事になる。
だが、その前に海底でする事が・・・。

「有った有った。　政府専用秘匿回線用海底通信ケーブル」

軌道上での情報収集の結果、本土近くの海底に埋設してある事が判明した海底ケーブルに用があった。
基本的な事だが、異邦人たる自分には戸籍が無い。
アメリカで活動する以上は、確実に必要なものである。

「政府筋から、情報機関筋に・・・結構一杯有るな。　居ない筈の人間を一人存在させるには」

そんなこんなで、今までのシャドウワークじこみの腕まいを存分に振るった。
その結果、一人の人間が情報上に違和感無く誕生した。

“ブルース・オースティン”

これが新しいオレの名前と成る。
これで、最低限の準備は完了。
後は、粛々と行動して行くとしよう。

「あ～あ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これから暫く事故が続くな」

第三話　何事も土台が重要（後書き）

多分、奇麗事だけで人一人の存在を作ること出来ませんよね・・・？

第四話　日々平穏に過してる心算です・・・多分。

不幸な事故が偶々増加した日々から1年程経った頃、俺は動きだす事にした。

因みにこれまでは、特に大きな動きを見せはしなかった精々、表に出せない裏金をちょろまかして、とある町に一軒の機械修理工房を開いたぐらいだ。

主な業務は、一寸した電化製品や農業機械、玉に車の修理等である。

利用客の声は

・冷蔵庫を修理して貰ったら、月の電気代が3分の2に成った。（３０代女性・主婦）

・トラクターの整備を頼み戻って来たら、燃費が3割アップしていた。（４０代男性・農家）

・ＰＣの修理を頼み戻って来たら、処理速度が大幅にアップしていた。（２０代男性・学生）

等等である。

工房の評判は概ね“腕は最高に良いが店長が無愛想”と言う評価だ。

微妙～に、納得がいかない評価である。

まぁ、そんなこんなで表面上は日々平穏に過して居る。

「と言う事で、射撃場に来てみたしだいだ」

「？　店長、誰に向かって言ってるんですか？」

「気にするな。　それよりさっさと準備をするぞ」

「は～い」

そんなこんなで日々平穏に過していましたが、そろそろ頃合かなと思い行動を起こした。

因みにこの同行者の助手は、アルバイト学生の“クリスティーナ・シャーロック”通称クリス。

近くのハイスクールの学生で、手先の器用な１６歳の女子学生である。

他にも何人かアルバイト希望の学生が尋ねてきたが、その中でも彼女の柔軟性や理解力は一番優秀だった。

まあ、見た目は只の天然お気楽娘にしか見えないが。

「店長。　準備できましたよ」

「ああ、こっちも準備できた」

今回射撃場まで来たのは、こちらの技術で再現出来る様に作成したリニアライフルの試射の為である。

M地球製のリニアライフルにはOTM（オーバー・テクノロジー・マクロス）技術が使用されているので、OTM技術を使わない形での再現を試みた品物である。

M2をベースにリニアライフル仕様に改造を施した品である。

最も、OTM技術を使用しない事を前提に組み立てた為、素材レベルで色々と問題点が多発している。

「おいブルース、標的に戦車を用意しろだなんて、今日は一体何の試射だ？」

「ああ、爺さんか。　何、一寸した技術書を手に入れてな。　面白そうだから作ってみた」

「何の？　まあ良いさ、金さえ払ったくれればこっちとしては問題無いさ」

トレーラーハウスから姿を現した、恰幅の良い白髪の爺さん。

この射撃場のオーナーである。

この爺さん、どう言う伝手があるのかは分から無いし、調べる気も無いが、標的の準備を頼むとWW？時代の重戦車を調達してきた。

「それは良かった。　一寸派手に成ると思うから、後片付けの方は頑張ってくれ」

「そりゃどう言「店長、チャージ終了しましたよ」・・・」

「と言う訳だ、早速始めさせて貰う」

爺さんが何か言いたそうにしているが、クリスから試作エネルギーキャパシターへのチャージが終了した事が伝えられので話を打ち切り試射の体勢に入った。
Ｍ２を改造した、車両固定式のＲＲＸ－Ｍ０。
設計上は口径１２．７ｍｍのタングステン製の硬芯炸裂鉄鋼弾を、電磁加速と液体炸薬によって秒速２ｋｍ超の初速で打ち出される事になっている。

「いいか？　行くぞ・・・５・４・３・２・１・０！」

ＲＲＸ－Ｍ０が火を噴いた。
電磁加速され、硬芯炸裂鉄鋼弾が超高速で飛翔する。
弾は狙い違わず、重戦車の正面装甲板に命中した。
装甲を突抜け、車内に飛び込み高性能爆薬に点火。
車内を爆砕し、砲塔部を内部から吹き飛ばした。

「こ、こいつは・・・」

「ふむ、凡そ計算通りだな」

「わぁ～。　戦車綺麗に吹き飛びましたね、店長」

三者三様。

爺さんは、目を見開き驚愕。

クリスはしきりに関心。

俺は冷静に分析する。

ＲＲＸ－Ｍ０の仕上がりは予想通り。

やはり、Ｍ地球との技術レベルの隔たりの問題点が噴出した。

ＲＲＸ－Ｍ０は現在、砲身冷却とエネルギーキャパシターへの再チャージを行っている。

大電力を電磁加速装置に流し込み加熱した砲身を水冷式冷却機が急速冷却している。

Ｍ地球製リニアライフルは、電磁加速装置に常温超伝導体を用いている為に冷却の必要は殆無い。

又、エネルギーキャパシターも現用技術での大容量小型化は不可能と言う結論に達した。

試作キャパシターは小型冷蔵庫並の大きさで一発分の容量しか確保されず、充填に1分前後必要と言う代物である。

電源も、車両エンジン直結のダイナモを回し発電する方式を取っている。

その後も、断続的に射撃を続行する。

２０発ほど撃った頃には砲身の廃熱が追い付かない様になり、射撃不能と成った。

標的としていた重戦車は見るも無残に破壊され炎上していた。

「・・・こいつは・・・トンでも無い物を作りやがったな」

「？　店長、あれって粗大ゴミを材料に作っていましたよね？
そんなに凄い物なんですか？」

「さぁ？　爺さんの様子を見る限り凄いんじゃないのか？　俺的には、興味深い玩具でしかないんだが・・・」

技術流用の検証用に作った品物なので、本当に玩具でしかない物なんだが・・・。
おい爺さん、何て顔で俺達を見てるんだ？
幽霊でも見えたか？

◇

（何つうもんを作りやがるんだ、こいつらは）

最近、町で評判に成っている工房の店主のアンちゃんが射撃場を貸せって言って来た時は、一体何の様だと思ったが・・・今じゃぁ、良い意味で予想外だったぜ。
標的に戦車を用意しろって言って来た時は、正気を疑っちまったな。

まあ軍人時代に作った伝手を使って、破棄予定のWW?時代のオンボロ戦車を二束三文で手に入れてやったがな。
当日、工房のアンちゃんがアルバイトの嬢ちゃんと一緒にジープに乗ってやって来た時には思いにもし無かったよ、用意した戦車が蜂の巣の鉄屑に成るとはよ。
ジープの荷台に掛けられたシートの下から出てきた、M2重機関銃の見た目は異様だったな。
延長された銃身に付けられたカバーから、コードが何本も延びて荷台の小型冷蔵庫と給水タンク繋げられた姿はよ。
一体何の玩具だ?って思っちまった。
その認識も直に、引っ繰り返っちまったがな!
試射をした時は、人生の中でもそうは無いって位に驚いちまったよ。
たった一発の銃弾で、ボロとは言え正面から重戦車を破壊しちまうんだからな!
だが、本当に驚いたのはこの後だったよ。
あいつら、こんな凄い物を粗大ゴミなんかで作ってやがったんだとよ!
そして思ったよ、これならあいつ等にも通用するんじゃないかって。

(確かあいつ、今は軍の技研所長を遣ってるって言っていたな)

◇

「・・・ん？　何か今、背筋に冷たい物が走った様な気が？」

第四話　日々平穏に過してる心算です・・・多分。（後書き）

ブルースさんは、少しずつ行動を起こして行く心算でした。

感想待っています。

第五話　不本意ながら、請負業務始めました。

１９８１年８月上旬

ＲＲＸ－Ｍ０の試射から半年が過ぎた。
何処でどう間違ったのかと、後悔する日々が続いている。
今現在、自分とクリスは国防総省の外部協力者をしている。
所属は、米国陸軍技術研究所・技術開発局装備課・銃砲技術開発部・ＥＭＬ（Ｅｌｅｃｔｒｏ　Ｍａｇｎｅｔｉｃ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ：電磁投射砲）開発担当外部協力班だ。
班と言っても人員は、自分とクリスの二人だけ何だがな。
何でこうなったかと言うと、爺さんが原因だ。

ＲＲＸ－Ｍ０の試射から1週間ほど経った頃、工房に数人の黒服が姿を見せた。
初めは裏金流用か戸籍偽造がバレたかと思ったが違った。
極普通に来客対応をしてみると、黒服の代表者が用件を切り出してきた。

「ブルース・オースティンさんですね？　私は米国陸軍技術研究所所属“イアン・マクレーン”技術中尉です。　今回工房を訪ねさせて頂いたのは、あなたが作成されたリニアライフルの件です」

「誰から、その事を聞いたんだ？　クリス、お前か？」

「？　違いますよ、店長。　私じゃないですよ」

ＲＲＸ－ＭＯの事を知っているのは自分とクリスと爺さんだけだから、漏れるとすれば後は爺さんからか。

「情報提供者は、ガードナー退役陸軍技術中佐です」

あの爺さん、元軍人の将校かよ。
失敗したな、やっぱり身元を洗っとけば良かった。
もう遅いか。

「中佐より頂いた情報で、あなた方が作成された品が我々にとっても有用だと考えました。　そこで物は相談なのですが、その品を我々に譲って貰えないでしょうか？　勿論、謝礼は十分に」

「謝礼と言われても……な？」

「言われても……ね？」

俺とクリスが顔を見合わせ、曖昧な笑みを浮かべる。
中尉さんも不安な顔を向けてくるが、まぁ……ね？

「申し訳ないがアレ、今壊れてるんだよ」

「元々、粗大ゴミの寄せ集め品ですし」

「……」

取り合えず撃てれば良いかな？的に作った品だったので、今ＲＲＸ－Ｍ０は壊れている。
銃身は熱膨張で変形し、試作エネルギーキャパシターと加速用コイルは熱で所々溶解した。
何か中尉さんの顔色が段々悪くなっている様な気が……。

「あ～材料を用意してくれるのなら、一日有れば同じ物を作る事は出来るが？」

「コイル巻に時間は掛かりますけど、組み立てだけなら１日有れば作れますよ？」

「ほ、本当ですか！？」

偉く喜んでくれるな。
２０発も撃てば壊れ様な品が、そんなに嬉しいのか？

「ならば是非、材料も機材も直にご用意しますので」

まぁ良いか。

そんなこんなで、材料が届けられ完成品と仕様書を受け渡したのは交渉から3日後だった。
その後、数日は平穏な何時も通りの日常が過ぎ去っていった。
しかし、ＲＲＸ－Ｍ０の試射から2週間後、事態が急転直下で動いた。

「……て、店長」

「……で、マクレーン中尉。　これは一体どう言う事だ？」

何故か知らないが俺とクリスは今、マクレーン中尉と共に陸軍技術研究所の小会議室に居る

「その、え～っと。　オースティンさんからお譲り頂いた品の評価試験の結果が思いの外良好だった為、上が是非とも実用化の方向で計画を推奨して欲しいと……」

「したいのなら、すれば良いじゃないか？　何故俺たちが此処に呼ばれる？」

俺を巻き込むな。

物があれば、そこから自分達で複製品位は作れるだろうが。

「お恥ずかしながら今現在、技研では省内でＡＴＤＰ計画と呼ばれる計画に大半の人員が掛かりっきりの状況でして、新しい分野の研究に人手を割く余裕が無いのです。　しかし、それを理由にコレ等を破棄してしまうのは余りにも惜しいと我々は判断しました。そして、人員が足りないのなら開発者に継続して研究して貰えば良いではないか？と言う結論に達しました。　そこで相談なのですが、オースティンさん、シャーロックさん。　このＥＭＬを完成させて貰えないでしょうか？」

……いやさ？

問題点を改善して完成させるだけなら、割と簡単だよ？

でもさ、一般市民に丸投げって言うのはどうよ？

仮にも国防を預かる一部門が、忙しいからと言って丸投げは無いよ丸投げは。

しかも、場の雰囲気的に断るのは無理そうだし。

溜息しか出ないなぁ。

それとな、クリス。
期待した目でこっちを見るな。

「……予算と時間は多めに貰うからな」

せめてもの抵抗だった・
結局、俺の工房は国防総省の依頼でＥＭＬを作成する事になった

◇

（本当にこれは凄い！　ガードナー退役中佐の話を聞いた時は眉唾だと思っていたが、これ程の物だとは！）

私は目の前にあるＭ２の改造品、仕様書に書いてある名称ＲＲＸ－Ｍ０に心を奪われていた。
ジープの荷台に固定されたＲＲＸ－Ｍ０からは何本もコードが延び、同じく荷台に備え付けてある小型冷蔵庫と給水タンクに接続されている。
仕様書によると、小型冷蔵庫がエネルギーキャパシターで給水タンクが冷却水と成っている。
発射手順はジープのエンジン直結のダイナモで発電し、エネルギ

ーキャパシターに蓄積、弾丸の発射と連動し加速コイルに順次通電と成っている。

１２．７ｍｍタングステン製の硬芯炸裂鉄鋼弾を２Ｋｍ超の初速で発射するトンでも銃。

まぁ、試作品らしく毎分１発で２０発前後撃つと壊れると言うがそこは多めに見よう。

問題はそんな事ではなく、その威力だ。

ＷＷ２時代の重戦車を蜂の巣にしたと聞いていたので、標的にと用意されたのはＦ－４の正面装甲とサンプルとして保管してあった突撃級の前面装甲だ。

結果は、Ｆ－４の正面装甲は１発で貫通し後方の固定用治具を破壊した。

突撃級の前面装甲は１発目で装甲厚の７０％を抉り取り、２発目で貫通し後方の固定用治具を破壊した。

この結果に発射試験に参加した研究員は皆、驚愕と感動と僅かな嫉妬を覚えた。

その後も、ＲＲＸ－Ｍ０が潰れるまで取れる範囲でデータを採取する。

それら採取されたデータを纏め、報告書を上に提出した。

これに対し上層部の反応は早く、ＥＭＬ開発の命令が降りてきた。

だが困った事に技研は今、ＡＴＤＰ計画で余剰研究員は枯渇している。

それでも正式な命令が降りているので、研究開発はしなければ成らない。

そこで思いついたのが、ＲＲＸ－Ｍ０の開発者であるオースティン氏に作製を依頼し様という物だ。

◇

（彼ならきっと、この依頼を受けてくれる筈だ！）

「……あれ？　もしかして、今の状況は初期計画とそんなに差異無く無い？」

第五話　不本意ながら、請負業務始めました。（後書き）

結果オーライ？
それとも、不幸～だ？

感想待っています。

第六話　試作品提出、割と真面目に作っています。

１９８２年２月中旬

国防総省からの依頼を受けてから、凡そ一年が経った頃。
中間報告用として、試作機ＲＲＸ－Ｍ０１を軍の方に提出する事にした。
今回の品は粗大ゴミのリサイクル品でなく、週末に直々通って技研の試作機破棄庫で拾い集めた部品を使用している。
軍用品だけあって、中々の品質と精度を持った部品が集められた。
搬送に当って俺達と軍の繋ぎ役のマクレーン中尉が品物を受け取りに来たが、何と言うか雰囲気が怖い。
まるで一日絶食させられ犬が、目の前に用意されたご飯をお預けされたみたいに。

「それではマクレーン中尉、ＲＲＸ－Ｍ０１の輸送を頼む」

「ＲＲＸ－Ｍ０１、確かに受領しました。　搬送作業はお任せ下さい！」

無駄に力入ってないか？
それに何故か、中尉に随行してきた大型トレーラーの中にジープ事運び込まれているし。

前のと扱いが違いすぎないか？
そのジープも、自走できるぞ？
まぁ、良いけどさ。

「あっ、そうそう。　序にこの書類と報告書も一緒に頼む。　ＲＲＸの改良点の考査と新しい奴の仕様書だ」

「お預かりします」

ＲＲＸ－Ｍ０１、ＲＲＸ－Ｍ０を軍用部品を使って改修して品だ。
基本的に新規設計製造した部品は無いが、スクラップにされていたＦ－４等の廃棄戦術機から部品取りをして、再加工した物を使用している。
特に噴射ユニットの、超耐熱単結晶合金は役に立った。
基本的にＲＲＸ－Ｍ０は、耐熱や冷却に問題点が集中していたと言っても良い。
冷却系もＲＲＸ－Ｍ０は水を使用していた水冷だけだったが、ＲＲＸ－Ｍ０１は水冷＋ガス冷の冷却系に変更し冷却効率を上げた。
エネルギーキャパシターも使用する材料の変更で、同じ大きさのまま三発分のエネルギーを貯める事が出来る。
ＲＲＸ－Ｍ０に比べて周辺機材は少し大掛かりにはなったが計算上、加速用コイルと砲身冷却に２０秒で再発射が可能になった。
発射サイクルは毎分３発。
キャパシターを２基設置したので、交互にチャージしながらの射撃ならば同一サイクルでの連続射撃が可能となる。

「今回の改良は冷却系の強化と各部品の耐熱性の向上に主眼を置いてあるから、１００発位なら焼き付く事は無いと思う。　また、廃品の再利用品だから製作コストも其処まで高く無い。　電源や周辺機材の小型化は、次回以降だ」

「期待させて貰います。　我々はまずこの、ＲＲＸ－Ｍ０１の評価試験から行わせて貰います」

そう言いながら、マクレーン中尉達は帰って行った。

正直言ってＲＲＸ－Ｍ０１は常温超伝導体製加速コイルでも作らない限り、単銃身でのこれ以上の安全な発射サイクルの向上は余り見込めない所まで冷却系は性能向上させた。

電源に関しては、ガスタービン発電機を小型軽量化した物をと考えている。

周辺機器の小型化も、専用に部品を設計製造すればコストは嵩むが解決は出来る。

そう遠くない内に依頼の品は完成品が出来るだろう。

まぁ、俺にとってＲＲＸ－Ｍ０１は軍用部品を使ってのＭ地球製リニアライフルの再現テストベットでしか無いのだがな。

それに今回の依頼のお陰で、今現在の表で使われている米軍の技術レベルが凡そ分かったのは収穫だ。

ＨＩ－ＭＡＥＲＦ計画の技術やＧ元素の存在を考慮すれば多少劣化すれど、Ｍ地球製兵器群の製造は可能かも知れない。

◇

（言葉が出ないとは、この様な時に使う言葉なのかも知れないな）

オースティン氏から預かってきたＲＲＸ－Ｍ０１。

前作ＲＲＸ－Ｍ０の改良品だ。

私達は前回と同じ様に標的を用意して、発射試験に臨んだ。

その結果は、前回と同じ様に驚愕の内に始まった。

銃弾の威力こそ前作と変りは無いが、今作は２０秒の同一サイクルで連射が可能となっていた。

前作は２０発前後で砲身や電装が熱で溶解していたが、今作では１００発程連射が可能で、十分な冷却時間と高温に成った冷却水の交換で再度連続発射が可能と言う出来に仕上がりっていた。

冷却系の強化と耐熱性の向上に主眼を置いていると言っていただけあって、流石オースティン氏としか言えない。

砲身と加速コイルの冷却に２０秒、毎分3発と言う発射速度。

このままでも、汎用輸送車両に搭載すれば現用戦車の簡易品としても使用できる。

貫徹能力は主力戦車の１０５ｍｍライフル砲を大幅に上回り、射程も５０００ｍと極めて長い。

何より小口径弾薬の為、一車両の保有弾薬量が戦車砲の数十発とは桁違いの保有量になるのだ。

物量戦であるＢＥＴＡとの戦いに置いて、戦車砲と同等の攻撃を長期的に継続して行えると言う大きなアドバンテージを得る事が出来る。

これ程の品なのにオースティン氏からは、更なる小型化と高性能化が進む予定と聞いている。

（製作コストも安いし、こいつを少数量産して実践運用テストに廻してみるか？　確か、次期汎用輸送車両の試作車も完成したと聞いた事がある。　試作品同士、実験兵器と言う事で製作案を上申して見るか）

◇

「砲身を多砲身化すれば、特殊な材料を使わなくても発射サイクルを向上させられないか？　……あれ？　俺、何で真面目に改良案考えてるの？」

第六話　試作品提出、割と真面目に作っています。（後書き）

２砲身にして１０秒１発の毎分６発にするか、４砲身にして５秒１発の毎分１２発にするべきか。

感想待っています。

第七話　裏仕事と依頼完了？（前書き）

お気に入り登録１００件突破、皆さん有難うございます。

第七話　裏仕事と依頼完了？

１９８３年１月下旬

ＲＲＸ－Ｍ０１の提出から凡そ１年。
試験結果が良好だった為、技研上層部がＥＭＬ実用化の兆に重い腰を動かした。
既存品銃器と廃棄予定の部品によって作られたＲＲＸ－Ｍ０１でこの結果なら、専用に設計製造したらどれ程の物だろうと。
そして、どのルートでこの情報を得たのか知らないが、ジネラルエレクトロニクス社（以降：ＧＥ社）が共同開発企業にと名乗りを上げた。
初めＧＥ社はこちらが小規模の工房と言う事もあり、高圧的な態度で不平等な契約を迫ってきた。
まぁ、片や米国でも有数の大企業、片や小さな町の小さな個人工房だからな。
お陰で久しぶりに仕事（裏仕事）をする事に成ったが。
その結果、契約に関係していたＧＥ社重役陣が汚職や脱税で次々に退陣した。
そのかいもあって、次の契約交渉は実にスムーズに事が進んだ。
担当者の顔が引きつって青くなっていたのは、実に笑えた。
ゴタゴタが片付き開発共同が進むようになったが、基本の開発は既に完了していたので設計図をＧＥ社に渡して試作品の製造を任せた。
そして遂に試作品ＲＲＸ－Ｍ０２が完成した。

「設計図通りの出来みたいですね」

「ええ、オースティンさんから預かった設計図は殆ど手直しは必要有りませんでしたし、基本的なデータも出揃っていたので開発自体に大きな問題は出ませんでした」

「それ以外で、問題が有った様な言い方ですね」

「貴方が言いますか、貴方が？」

「さて、何の事やら？」

昔の事をネチネチと。

この人はＧＥ社のＥＭＬ開発担当者“グレッグ・ハワード”さん。

含み笑いを向けると、小動物みたいに怯える弄りがいの有る人だ。

「これから試射ですよね？　何処で遣る予定ですか？」

「一応、社の発射試験場を予定しています」

「それなら、早速向かいましょう。　クリス、移動するぞ」

「は～い」

俺達3人はＲＲＸ－Ｍ０２の搬送手続きをした後、ＧＥ社の発射試験場に向かった。

と言う訳で遣って来ました、ＧＥ社の発射試験場。

既にＲＲＸ－Ｍ０２はスタンバイされている。

ＲＲＸ－Ｍ０２、ＲＲＸ－Ｍ０とＲＲＸ－Ｍ０１から採取したデータを元に全面新設計のリニアライフルだ。

本体全長２０００ｍｍ・重量２５ｋｇの四砲身回転ドライブ式、５秒に1発のサイクルで毎分１２発で発射が可能。

全体としては、小型大容量エネルギーキャパシター（６発分）×２・冷却液タンク（２０？）・小型ガスタービン発電機・発電機用燃料タンク（２０？：一時間分）と言う総重量１００ｋｇ近い構成である。

そして、キャパシターのフルチャージには３０秒程掛かるので、発射サイクルも毎分１２発が今の所の限界である。

又、全長が伸び加速距離が伸びた分、初速はＲＲＸ－Ｍ０１より上がった。

液体炸薬と電磁加速の併用により、初速：２４００ｍ／ｓ～２８００ｍ／ｓ・射程距離：５０００ｍ～７０００ｍ・装弾数：１帯１

２０発（ベルト給弾）と言うスペックだ。
まぁ、多数の弾薬に複数の周辺機器に本体重量だけで２５ｋｇと言う、生身の人間一人での行動と運用は不可能と言う欠点もある。

「もう少し、軽量小型化が出来ると良いのですがね」

「ハワードさん、現状でこれ以上の小型化は難しいですよ。　室温超伝導体（グレイ９）でも有れば、冷却系の撤去・キャパシターの大容量小型化なども出来て総重量も半分以下に出来るんですが」

「あはは、店長。　そんな物、まだ何処も作って無いから無理ですよ」

「……」

序に揺さ振りも兼ねて、ハワードさんの前でＧ元素の事を仄めかす様に話題に出してみたが……ビンゴだな。
ＧＥ社の主任開発担当者クラスの人間なら、Ｇ元素の事も知ってるかもと思ってカマをかけてみたが……。
この反応なら、マズ知っているな。
まっ、現状でこれ以上の追求はしないがな。

「……あっ。　オースティンさん、シャーロックさん、試射が始まるみたいですよ」

「そう見たいですね」

「楽しみです」

話題を反らす様なハワードさんに促されて、試射体勢に入ったＲＸ－Ｍ０２の方を見る。

５００ｍ間隔で設置された前回と同じ標的に向かって、今正に発砲し様としている姿が目に入った。

◇

（若いのに本当に凄い奴らだ。　私が彼らと同じ年頃、一体何をしていた事か……）

ＲＲＸ－Ｍ０２の試射を見つつ、私は彼との出会いを思いかえす。

私が彼と出会ってから、もう１年位になるか。

初めて会った時の印象は、無愛想な青年と言う物だった。

どう言うルートか知らないが、軍の委託で民間のとある工房がＥＭＬを実用化し様としていると聞いた。

そして、上司からの指示はＥＭＬ開発を共同開発と言う形に持ち込み、その技術を奪えと言うものだった。

流石に私もそれは拙いのでわと上申したが聞き入れて貰えず、用意された契約書を持ち渋々その工房との契約交渉に足を運んだ。
私は気持ちを切り替え、相手が２４歳と聞いていたので交渉を有利に進める為に高圧的な態度で挑んだ。
交渉は初め順調に進んでいたが、条件面の確認で問題が発生した。
正直、何だこの条件は！？と言うのが私の本音だった。
余りにも、彼等に不平等な条件が羅列してあった。
無愛想な彼も、眉を顰め契約用紙を凝視している。
幾ら米国有数の企業であろうとも、この契約は無いと思う。
流石に私も一度会社にこの契約書を持ち帰り、上司を再度問質したいと思ったので彼に１週間後にもう一度来ると言い契約書のコピーを残し会社に戻った。
会社に戻り上司を問質すが、残念な事に契約条件の変更は認めないと言う返事が返ってきた。
私は１週間後に再度彼の元を訪ねるのが、とても気が重くなる思いだ。

しかし、その心配も翌日から解消され始めた。
契約交渉を指示した上司を筆頭に、契約内容の作製に関わっていた重役陣が次々に汚職や脱税で退陣や逮捕され始めたのだ。
社内で流れる噂では、ＡＴＦＳ計画関連のゴタゴタが一部重役の退陣理由だろうと言うのがの主流だ。
しかし、そんな中で私は違う理由だろうと半ば確信していた。
それが確固たる物に変ったのは、次に彼に会った時だった。
今でも、あの時彼が浮かべていた含み笑いは忘れられない。
あの時だろうな、彼との関係の上下関係が決まったのは。

その後の契約交渉は、比較的スムーズに進行した。
契約内容の変更は、社の重役会でも色々紛糾したらしいが最終的にはＣＥＯの鶴の一声で纏ったらしい。

契約内容は凡そ平等、少し彼が有利と言う形で話は落ち着いた。
彼は、一体どんな手を打ったんだか……。

色々有ったが、契約交渉が終わった後のＥＭＬ計画の進行は極めて順調に進んだ。
殆ど完成品と言っても良い設計図、豊富な各種採取データ、計画の７０％以上は我社が参入する前に完了していた。
我々が手を出した所と言えば、設計図通に部品を製造し組み立てる……これ位だった。
そして完成品が今、目の前で断続的に火を噴いている。
５００ｍ間隔で置かれている標的を、ＲＲＸ－Ｍ０２は次々と蜂の巣にして行く。
戦術機にも使用されている装甲版は、飴細工の様に貫通され後方の固定用治具は破壊されていく。
戦術機を初めて見た時も驚いたが、これには別種の驚きがある。

（彼等とは、長い付き合いに成るかも知れないな……）

◇

「これで依頼も達成か、暫くはゆっくりと……え？　新しい依頼？　ゆっくり出来ないの？」

第七話　裏仕事と依頼完了？（後書き）

戦術機関連にも関わるべきか、銃器関係一本で頑張るべきか。

感想お待ちしています。

第八話　迷惑な人と新たな依頼（前書き）

お気に入り登録２００突破、３００間近。

有難う御座います。

第八話　迷惑な人と新たな依頼

１９８３年２月下旬

ＲＲＸ－Ｍ０２の初試射から、一月。
大きな問題も発生させずに、ＲＲＸ－Ｍ０２は順調に試験項目を消化。
そんなある日、技研から次期汎用輸送車両の試作車両が一台届けられた。

「これは……この車両にＲＲＸ－Ｍ０２を搭載しろと言う事かな？　どう思います、ハワードさん？」

「多分、そうじゃないかと……。　こいつの天井に本体を備え付け車内に周辺機器を乗せた、簡易戦車として使う気ですかね？」

「攻撃力と機動力は兎も角、これ紙装甲ですよ？　多分、一撃でも食らったらお仕舞いですよ？　店長、これ乗りますか？」

無論断る。
レーザー兵器を使う敵に、地面を走る４輪の紙装甲で突っ込む等正気の沙汰とは思えない。
ピンポイント・バリア……いや、せめて対光学兵器気化塗料が欲

しい。

「辞退する。　今の時期に車載テストと言う事は、欧州辺りの戦線で実戦テストでもする気か？」

「多分その心算だと思いますよ？　次期汎用輸送車両の試作機を引っ張り出して着た所を見ると、一緒に実戦テストを済ませて仕舞おうって事じゃないですか？」

「店長、宣伝も兼ねているんじゃ無いんですか？　ウチ（米国）が、こんなの作りましたよって」

有りえる。

流石にＲＸ－Ｍ０２は輸出しないだろうが、ＲＸ－Ｍ０１のモンキーモデル位なら輸出しそうだな。

基本破棄部品の寄せ集めで作ったから製作コストもかなり安いし、輸出すれば儲けはかなり出そうな気が。

「まぁ、そこの辺りは上に任せるさ。　取り合えず注文の品を完成させるとしよう。　何ぜか、他の依頼も入ったしな」

「おや？　オースティンさん、他にも国防総省から依頼が入っているんですか？」

「ええ、薮蛇を踏んで仕舞いましてね」

「技研から、破棄されえた強化外骨格を貰ったんですよ。　趣味で改良したのをマクレーン中尉が目聡く見つけて、また上に報告したから研究開発依頼が舞込んで来ちゃいました」

クリスの言う通り、又マクレーン中尉が余計な事をしてくれた。
アレは、ＲＲＸ－Ｍ０１を製作していた時の事だ。
技研の試作機破棄庫に部品拾いに出かけ、倉庫の中を物色している時に見つけた。
倉庫の隅に、ハーディマンの改良機みたいな奴が鎮座していた。
装甲板や電源を取られ、基礎フレーム剥き出しの姿で。
何と無く気になったので技研の研究員に確認を取った後、工房に持ち帰りチマチマ改造を施した。

「どんな物を作ったんですか？」

「基本、破棄部品の寄せ集めで作っていたんですけど……。　不思議な事に、是非開発続行をと言う事に話が進んで」

「……又二人で、トンでも無い物を作ったんじゃ無いんですか？」

「……？　そうなんですか、店長？」

知らん。
基礎は普通の強化外骨格と変らん。
大きく変更した所なんか、操縦系を後追いのマスター・スレイブ方式からＥＸ－ギアの先行行動筋電位観測方式に変えた所と、搭載プロセッサーを増やして並列処理速度を上げた位だ。
確かに動作速度が上がって、格闘戦も出来る様になったが其処まで驚くような事か？
その事をハワードさんに話したら、変な表情をしていた。

「……それだけ遣れば、十分ですよ」

十分なのか？
基準が良く分からん。
ＥＸ－ギアの様に、機装強化兵競り合う事は出来ないんだが。
正面から対峙したら、袖一色で破壊されると思うぞ？

◇

（ははっ、流石はオースティンさん！　銃火器専門かと思えば、こんな技術も持っているとは！）

今、私の目の前で2台の強化外骨格が重苦しい足音を立てながら格闘戦を演じている。
軍が採用している本来の強化外骨格と言うのは、一兵士単体で使用が困難な銃火器を運用する為の装備の事だ。
間違っても、今目の前で行われている様な格闘戦を行う様な装備では無い。
ＥＳ－Ｘ０。
それが、目の前で格闘戦をしている強化外骨格の名である。

初め、私がコレを見たのはオースティンさんの工房だった。
ＲＲＸ－Ｍシリーズ開発に伴い拡張された作業場の隅のに、ヒッソリと置かれていた。
オースティンさんが、技研から強化外骨格の基礎フレームを持ち出していた事は知っていたが、どの様に扱っているかは知らなかった。
強化外骨格は見た所、内部機器保護用のシンプルな一時装甲が取り付けられている状態で置かれていた。
オースティンさんに聞いた所、クレーンやリフトの代わりに使っているそうだ。
そんなやり取りをしていると、シャーロックさんが強化外骨格に乗り込み動かし始めた。
その動作は、私が見てきたどの強化外骨格よりスムーズかつ精密だった。
シャーロックさんが、強化外骨格を着用したままジープの後部を持ち上げドライバーで作業を続行している姿を見て、私はＲＲＸ－Ｍ０を見た時と同じ様な衝撃を受けた。
そして、決意した。
この強化外骨格を完成させるべきだと。

私は早速技研に戻り報告書を作成し、上層部にこの強化外骨格の

事を訴えた。
そしてＲＲＸと言う実績が有った為、国防総省からもＧＯサインが出た。
私は早速オースティンさんに、軍用強化外骨格の製作依頼した。
オースティンさんはＲＲＸの時の様に難色を示されたが、私が誠心誠意何度もお願いに向かうと最終的には了承して貰えた。
そして、ＥＳ－Ｘ計画と名付けられた新型強化外骨格開発計画が始動した。
既に開発最終段階まじかのＲＲＸ開発計画は、新たに参入した共同開発企業が後を引き継ぎつつ主体に成って進める事が決まった。

そして、ＥＳ－Ｘ計画の最初成果が今目の前で格闘戦を繰り広げていた。
既存の強化外骨格を遥かに上回る追随性と運動性。
繊細かつ自在に動く五指マニピュレータ。

（まだ計画も始まったばかりなのに、この機体！　凄い。　凄いですよ、流石オースティンさん！）

◇

「……ん？　何か今、誰かが叫んだ様な気が？　空耳か？」

第八話　迷惑な人と新たな依頼（後書き）

やっぱりあの人が原因で、新たな厄介事が舞い込みます。

感想待っています。

第九話　苦労人と暑苦しい人（前書き）

お気に入り２００突破とか言っていたら、いつの間にか５００突破。

有難う御座います。

第九話　苦労人と暑苦しい人

１９８３年４月中旬

ＲＲＸ－Ｍ０２の各種試験は９割方終了、残すは実戦テストのみとなった。

実戦テスト終了後、採取されたデータと戦訓を反映した最終調整を行った後に、量産開始と言う予定に成っている。

其れに伴い現在のＲＲＸ開発計画は俺の手を離れ、以降はＧＥ社主体で進められる事になっている。

又、幾つか問題点はあるが試作ＲＲＸ－Ｍ０２搭載汎用輸送車は一応の完成を見た。

「漸く、実戦テストまで漕ぎ付けましたね」

「ええ。　むしろ、偏執的なまでの試験項目数を作った試験管に感心しますよ」

「そうですよ、大まかに分けて３００項目、全項目の総計が１６４５項目。　幾ら新規格品と言っても、多過ぎるんじゃないんですか？」

そう、評価試験が３ヶ月以上も掛かったのは、途中から追加された試験項目数の多さに原因がある。

耐久テスト等の基本試験から冷却液に泥水や海水等を使った時の

影響テスト等、重箱の隅を突付く様な試験項目が多数列記されていた。
同型同仕様のＲＲＸ－Ｍ０２を２０セット増産し、各種試験を平行処理した上でも３ヶ月以上掛かった。

「まあまあ、試作車両は来週にでも欧州戦線派遣部隊に向けて輸送するそうです」

「あそこは撤退戦の最中じゃなかったですか？　もう少し後方支援体制の整った安全な所で、テストはした方が良いんじゃないんですか？」

「以前、シャーロックさんが言っていた事が当ったみたいです」

「私……あつ！　販売宣伝目的じゃないかって事ですか？」

「はい。　撤退戦の最中に汎用輸送車両搭載兵器で、大型ＢＥＴＡを狩る事が出来ると印象付けたい見たいです」

其れが、項目追加の原因か。
ＲＲＸを欧州各国との政治取引のカードにしたいのか。
大型種を遠距離から狩る事が出来る車載兵器。
追い詰められている欧州当りなら、多少譲歩してでも手に入れたくなるだろうな。

「成る程。　まぁ、そこら辺に俺達は感知しませんよ。　薮蛇は避けたいので」

「そうですね。　私も自分から進んで、軍や政治関係のドロドロした世界には関わりたくありません」

「私も出来れば遠慮したかったですよ」

まぁ、ハワードさんの場合は、ＧＥ社の計画担当者と言う事もあって仕方無い。
そんなハワードさんに、こう言うのは本当は辛いのだが……。

「そう言う訳で、ハワードさん。　……後は任せた」

「頑張ってくださいね」

「ちょっ！　オースティンさん！　シャーロックさん！　見捨てないで下さいよ！」

断る。
試験場を去ろうとすると縋って来そうだったので、含み笑いを浮

かべると諦めてくれた。
気の毒なので、後で何か送っておこう。

ＧＥ社の試験場を去った後、今度は技研の方に顔を出した。
不本意ながら、ＥＳ－Ｘ開発計画に関わる事に成った為だ。
既に、ＥＳ－Ｘ０として工房で使っていた強化外骨格を搬入している。
守衛に挨拶をしつつクリスト共に、技研の屋内動作試験場に向かう。
試験場内では、２台のＥＳ－Ｘ０が重々しい音を立てながら軍隊格闘の組み手を行っていた。

上段回し蹴りを繰り出す機体に対し、もう一台は体を屈ませ回避しつつ軸足に対し下段蹴りを放つ。
軸足を狩られ、背中から地面に叩き付けられ決着が付いた。

模擬戦が終了し立ち上がった２台は、試験場の隅で駐機体勢で停止した。
先ず胸部が鎖骨を中心に９０度展開、続けて腹部が左右に開く様に展開、最後に腰部か股関節を中心に９０度展開した。
そして、ＥＳ－Ｘ０の中から人が降りてきた。
取り合えず、挨拶はしておこう。
技研の研究員はＥＳ－Ｘ０に群がっているから無視して。

「お疲れ様、ＥＳ－Ｘ０の調子はどうですか？　“ローズ少尉”“ノエル准尉”」

２台から降りてきた二人は、ＥＳ－Ｘ計画の為に陸軍から派遣されてきた男女の専属テストパイロット達だ。
１号機担当テストパイロット“ギルバート・ローズ”少尉。
２号機担当テストパイロット“シャロン・ノエル”准尉。
ＥＳ－Ｘは男女兼用での運用が予定されている為、男女一人づつ軍に派遣して貰っている。

「ああ、オースティンさんですか。　ＥＳ－Ｘ０は素晴しいの一言です」

「ローズ少尉の仰る通りです。　今までの強化外骨格とは、別次元の代物ですよ！」

「そうですか」

正直言って分からん。
本当に彼等が言う様に、凄い物なのだろうか？
ＥＸ－ギアに比べて主機出力も低ければ、モーター出力も低い。
センサー系は言うに及ばず、装甲も紙に等しい。

「今までの強化外骨格は動きが鈍く、重火器の運搬固定運用器具って言うのが精々でしたが。　こいつなら、ＢＥＴＡ相手に格闘戦を挑んでも勝てます」

「そうです。　特に機体の追随性が段違いです！　既存の物で同じ様な動作をしようとすれば、バランサーが追い付かずに横転してます」

まぁ、ＥＳ－Ｘ０はパイロットがバランサーの一部みたいな物だからな。
筋電位を観測してコンマ数秒先行して動く機体だから操作感覚に慣れたら、今までの機体以上に動けるのは当然の事だしな。

「コイツをこのまま配備したって、誰も文句は言わないですよ」

絶賛するのは良いが、詰め寄るな。
それと、その案は却下だ。
そもそもコイツは、クレーンやリフトの代用品だった物だぞ？
配備するとしてもせめて、戦闘用の物として作り直してからだ。
だから、詰め寄るな。
頼むからクリス、そこでノエル准尉と話して無くてコイツを止めてくれ。

◇

（上官に技研への配属命令を貰った時は、こんなに凄い物に関わるとは考えても居なかったな）

辞令を貰ったのは、2月上旬の事だった。

新型強化外骨格開発計画が立ち上がったので、君を派遣する事に決まったと。

初めは新型強化外骨格と聞いて、あんなドン亀を今更……と思ったものだ。

技研に着くと応接室で、自分と同じ様に派遣されたらしい小柄な女性軍人、ノエル准尉がいた。

技研に配属されて、初めの一月は新型機に関する座学の講義だった。

何でも、この新型強化外骨格……ＥＳ－Ｘ０は民間人が作製した物が元と成っているらしい。

初めて説明を聞いた時は、この研究員はフザケているのか？と思ったものだ。

しかし説明の続きを聞くと、その認識が間違いだという事にすぐ気が付く。

試作機の稼動資料映像を見た時は、目を見開き椅子から腰を浮かせてしまった物だ。

その後、既存機との変更点や新型機のテスト上の注意点が細かく講義された。

そして一月後、実機によるテストが始まった。

歩行から始まり、垂直跳び、走行等の様々な動作パターンを繰り

返しテストした。
中でも5指マニピュレータ操作テストは難関だった。
特に、卵掴みが最難関だった。
いったい、幾つスクランブルエッグを作った事か？
この卵掴みが以外に上手かったのはノエル准尉だった。
畜生、コイツが正式配備される様に成ったら、絶対卵掴みを訓練項目に組み込んでやる。
そんな事をしつつ４週間程経つと、ＥＳ－Ｘ０をある程度不自由無く扱う事が出来る様になった。

そして始まったのが、模擬格闘戦テスト。
新型強化外骨格は、自分の体の延長の様に使用出来る事が最大の売りだ。
最初は一つ一つの動作を確認する様にユックリユックリとした動きで行っていたが、次第に動作のテンポアップして行った。
３週間も経つ頃には、生身で行う組み手と変らない程度に成った。

（これでも十分凄いのに、コイツは初期試作機と言う。　開発計画が進めば、一体どんな機体に仕上がるんだ！？）

◇

「だ・か・ら、そんなに近寄るなと言ってるだろ！　それと、そこ！　掛け算やめ、俺はノーマルだ！」

第九話　苦労人と暑苦しい人（後書き）

ＥＳ－Ｘ０のイメージは、武装の無い全身装甲のＩＳ（インフィニット・ストラトス）です。
大体、２．５ｍ～３ｍ前後の大きさを考えています。

感想待っています。

第十話　ユックリする時間が・・・。（前書き）

お気に入り６００件突破。

有難う御座います。

第十話　ユックリする時間が・・・。

１９８３年６月上旬

ＲＲＸ－Ｍ０２搭載汎用輸送車両が欧州に到着し、現地派遣部隊が運用し活躍しているらしい。

何でも遠距離から大型種を中心に叩いて、戦場で一役買っているらしい。

弾速も従来の物とは桁違いに早く、遠距離でも命中率が高く高威力の為とても重宝しているとの事。

それに伴い、予想通り欧州各国から問い合わせが殺到していると伝え聞く。

そんな訳で、ＲＲＸ計画の方は実戦テストも概ね良好らしい。

まぁ、順調なようで何よりだ。

それとは別に、ＥＳ－Ｘ計画。

本格的に、追加パーツの設計を始めた。

手始めにＥＳ－Ｘ０に各種パーツを追加し、稼動テストを行う。

脚部にイン・ホイール・モータ式ローラー、腰部に近接武装、胸部にバッテリー内臓強化装甲、腕部に打撃用ナックルガード付手甲、頭部に複合センサーユニット。

これらは、ＥＳ－Ｘ０の後付装備になっている。

稼動データを採取した後、ＥＳ－Ｘ０１の作成時に幾つかは内蔵し設計製作する予定だ。

そしてデータ採取の為、２台のＥＳ－Ｘ０は追加パーツを装着し、試験場内を縦横無尽に動き回っている。

「ローズ少尉、ノエル准尉。　追加パーツの調子は？」

「良好です。　追加バッテリーのお陰で出力・稼働時間共に大分伸びています」

「こちらも、良好です。　ローラはトルクが太いお陰で、坂道でも減速せず楽に登ってくれます」

「了解。　標的を出すので、破壊して下さい」

どうやら、特に問題は無いみたいだ。
本当か？と疑ったが本人達が良いと言うので、良いのだろうと思う事にした。
稼働時間も追加装甲で若干伸びたとは言え、２．５時間が限界。
ローラーも最高４０ｋｍ／ｈ辺りが良い所だ。
その上バッテリーの消費も著しく、全力稼動すると１０分程で枯渇する。
俺の持つ基準で言えば、正直言って欠陥機？と言う本音だ。

そんな事を考えながら、標的を試験場内に搬入指示を出す。
試験場中央に、砂の入ったドラム缶から破棄予定の装甲車などが搬入される。
準備が終わると、２台のＥＳ－Ｘ０は猛然と標的に突撃。
１号機はナックルガードを装備し、ドラム缶へ。
２号機はスーパーカーボン製試作近接武装バルディッシュを装備し、装甲車へ。

「うぉらぁぁぁ！」

1号機が裂帛の声と共にローラーダッシュと機体重量の乗った、見事なパンチをドラム缶に向かって放つ。

パンチを受けたドラム缶は鈍い金属音を放ちながら、中身を撒き散らしつつ試験場の端まで地面を跳ねながら飛んでいった。

「はぁぁぁぁ！」

2号機が裂帛の声と共に柄を延ばしたバルディッシュを構え、標的直前での高速旋回の遠心力とローラーダッシュと機体重量の乗った一撃を装甲車に叩き込む。

一撃を受けた装甲車は甲高い金属音と共に、前方から後方まで一直線に装甲を切り裂かれた。

「「「「おおっ！」」」」

データ計測室に、技研研究者達の歓喜の声が響く。

そしてＥＳ－ＸＯは次の獲物は……と言った風情で、次の目標に向かって疾走。

その後2台は次々に標的を破壊し、追加パーツ評価テストは終了した。

「う……ん。　ナックルガードは展開稼動部の強度不足。　バルディッシュは柄の伸縮部が強度不足か」

「すみません、オースティンさん。　扱い方が少し荒っぽかった見たいで」

「すみません……私も」

「いえ。　テストなので、不具合が出る事事態に、問題は無いんですよ」

そう、テスト内容自体に問題は無い。
問題はＥＳ－Ｘ０自体にある。
元が作業用だった事もあり、今回の様な全力稼動攻撃にフレーム強度が持たなかったのである。
テスト後の検査で、各関節部の負荷が許容値ギリギリと言う結果が出た。
いや、一部では負荷が限界値を超えている部分も有った。
流石に俺が改造した部分に問題は出ていなかったが、こうなると基礎フレームから再設計する必要がある。
詰る所……俺の仕事が増えるのだ。
クリスも色々仕込んではいるのだが、まだまだ甘い所も有り最終的には俺がフォローする必要がある。

「仕方ありません。　ＥＳ－Ｘ０は使い潰す心算で、データ採取をして下さい。　根本的な解決は次機で対処します」

欝だ。
何時に成ったら俺はユックリと日常を過せるんだ？

◇

（本当に凄い。　丸で、体の延長みたいに自由に動く！）

私は今、この鉄の塊に夢中だ。
嘗て夢破れた物が、形を変えて実現したからだ。
私は元々、戦術機のパイロットを目指していた。
しかし、適性検査の段階で基準に満たず、不適合と判断が下された。
そして私は代償物を求め、強化外骨格運用部隊に配属を希望し受理された。
しかし、現物を前に私は失望する事になる。
戦術機とは比べ物に成らない動作の愚鈍さ。
重火器の固定運搬しか、求められない役割。
何もかもが、私の期待を裏切る。
私は半ば腐りながら、軍務をこなしていた。
そしてそんな生活に終わりを告げる、転機が訪れた。

技研への派遣辞令だ。
新型強化外骨格開発計画。
そのテストパイロットに、私は選ばれたのだ。
当初、私は所詮は強化外骨格、新型であっても既存物と大差は無いと思っていた。
しかし、その認識はすぐに覆される。
愚鈍さを感じさせず、体の延長の様に自在に動く機体。
それだけでも、驚愕の一言なのにこの機体はそれ以上だった。
この機体ＥＳ－Ｘ０の開発者であるオースティンさんが追加パーツを製作し装備させた事で、まるで別の機体の様に変貌した。
ローラーダッシュで試験場内を疾走し、試作近接武装で標的を切り裂く。
ナックルガードを展開し、豪腕を持って標的を叩き潰す。
この機体は、何処までも私は魅入らせる。

（もっと、もっと！　もっと私を楽しませなさい！）

◇

「うわぁ！　な、何だ、今の寒気は！　何か今、舌なめずりされた様な気がしたぞ？」

第十話　ユックリする時間が・・・。（後書き）

どんなに頑張っても、作業機械は作業機械と言う事ですね。

感想待っています。

第十一話　応援要請は、拒否したいな。（前書き）

お気に入り登録７００件突破

有難うございます。

第十一話　応援要請は、拒否したいな。

１９８３年１０月中旬

実戦テストに出されていた、ＲＲＸ－Ｍ０２が戻ってきた。
３ヶ月ほど欧州戦線で実戦を繰り広げて来ただけあって、テスト段階で想定されていなかった様な使い方もされていた。
１００００m狙撃って何だ？
アレは狙撃銃じゃないんだが……。
まぁ、そんなこんなでＲＲＸ－Ｍ０２は最終調整は受け、量産されるはこびとなった。
正式名称：ＲＲ－Ｍ１“サジタリウス”と決まり、ＧＥ社が製造販売する事が決定。
これにてＲＲＸ開発計画は、一応の終了を見た。

そしてＥＳ－Ｘ計画、採取されたデータを元に基礎フレームから再設計し直し、全体を再構築したＥＳ－Ｘ０１がロールアウトした。
ＥＳ－Ｘ０１は素体としての完成を主眼に置いて開発、ＥＳ－Ｘ計画のベース機となる予定だ。

「ローズ少尉、ノエル准尉、ＥＳ－Ｘ０１の調子はどうですか？
基礎フレームの強度が上がった分、出力もアップさせたので大分感触も変っている筈ですが」

「そうですね。　出力が上がった分、色々と無理が利きますね」

「ＥＳ－Ｘ０の追加パーツが一体になってい分、機体全体の安定性が向上して使い易くなっています」

２台のＥＳ－Ｘ０１は、試験場内を力強く疾走する。

ＥＳ－Ｘ０をブラッシュアップし人型に近い外観になった恩恵で、ＥＳ－Ｘ０１の関節稼動域は自由度が更に向上し動きにキレが見える様になった。

２号機は主脚による走行から、脚部ローラを稼動させ高速移動形態に移行した。

脚部ローラーも、出力の向上の恩恵で５５ｋｍ／ｈまで最高速が上昇。

ＥＳ－Ｘ０を上回る速度で試験場を駆ける。

「そうですか。では試験場内に障害物を設置するので、駐機場でバッテリーの交換を行ってください」

「「了解」」

２台のＥＳ－Ｘ０１は駐機場で、パイロットが自分でバッテリー交換を始めた。

バッテリーは胸部・背部・両腰の４箇所に分散配置してある。

敵の攻撃によりバッテリーが破損し、行動不能になるリスクを出来る限り低くする為の措置である。

使用バッテリーの規格は全て共通化し、補給物資の調達の容易化

も計られている。
胸部と背部に各2つずつ、両腰に1つずつの計6つが搭載される。
稼働時間もＥＳ－Ｘ０の2．５時間を上回る、５時間と成っている。
そして2台は、手早くバッテリー交換を済ませた。
所要時間、３分半。
使用済みバッテリーを充電装置に戻していなければ、もっと短時間で交換出来ていただろう。

「障害物の設置終了。　ＥＳ－Ｘ０１各機は走破テストを始めて下さい」

「「了解」」

一号機は主脚、２号機は脚部ローラーでコースを走り出す。
設置されたポールの間をジグザグに駆け抜け、車など置かれた障害物を飛び越える。
その後も2台のＥＳ－Ｘ０１は、次々に障害物をクリアしていった。
結果、ＥＳ－Ｘ０１はほぼ人間と同じ動きが可能と言う結果が出た。
そして、ＥＳ－Ｘ０で発生したＥＳ－Ｘ０１で改善した基礎フレームの強度不足問題の実証試験を行う事にした。
比較の為、前回と同じ標的である砂の入ったドラム缶や装甲車を試験場内に用意した。

「ローズ少尉、ノエル准尉。　以前と同じ様に思いっ切り遣ってくれ。　近接武装の方も改良しているので、破損はしない筈だ」

「了解した。　思いっ切り遣らせて貰います」

「了解です。　手加減抜きでいきます」

準備が終わると、２台のＥＳ－Ｘ０１は猛然と標的に突撃。
１号機はナックルガードを展開し、ドラム缶へ。
２号機はスーパーカーボン製試作近接武装バルディッシュ改を装備し、装甲車へ。

「せいやぁぁぁぁぁっ！」

１号機が裂帛の声と共にローラーダッシュと機体重量の乗った、見事なパンチをドラム缶に向かって放つ。
機体出力が向上し、より強烈に成ったパンチを受けたドラム缶は鈍い金属音を放ちながら、中身を盛大に撒き散らしつつ試験場の壁に地面を跳ね飛びながら激突した。

「はぁぁぁぁ！」

２号機が裂帛の声と共に柄を延ばしたバルディッシュ改を構え、

標的直前での高速旋回の遠心力とローラーダッシュと機体重量の乗った一撃を装甲車に叩き込む。
一撃を受けた装甲車は甲高い金属音と共に、前方から後方まで一直線に装甲を大幅に切り裂かれながら跳ね飛んだ。

「「「おおっ！」」」

前回を上回る光景に、研究員一同歓喜の声が響く。
その間に、ＥＳ－Ｘ０１は次の目標に向かって疾走した。
全ての標的を破壊し、テストは終了した。

「良好良好。　各関節部の負荷も十分許容値範囲内、改良は上手くいったみたいだ」

前回の試験で発生した、基礎フレームの強度不足問題は解消された。
また、以前のテスト時に破損したガードナックルとバルディッシュも、今回の改良品は問題無く機能している。
ＥＳ－Ｘ０１は、最初の試験を良好な結果の内に終了。
後は細かい追試と改良を行い、完成度を向上させる予定だ。

◇

（ＲＲＸ……やっと量産に漕ぎ付ける事が出来た）

目の前にある先行量産型ＲＲ－Ｍ１“サジタリウス”を、感慨を持って眺める。

ＲＲＸ開発計画に参入して、凡そ一年半。

新規格兵装の実用化期間として考えれば、極めて短期間での開発であったと言える。

それもこれもひとえに、オースティンさんとシャーロックさんの尽力の結果だろう。

彼等が基礎研究と量産を前提とした設計図を作ってくれていなければ、後５年や１０年では実現出来なかっただろな。

それに出来たとしても、もっと非効率で大型化したものだろうがね。

まぁ、それは兎も角、ＲＲ－Ｍ１が完成した事は良いのだ。

しかし、実戦テストでＲＲＸ－Ｍ０２が欧州で活躍した事が原因で欧州各国から、ＲＲ－Ｍ１を輸出してくれと言う要望が多数寄せられる様になった。

現在政府もＲＲ－Ｍ１を輸出する気は無い様だが、何れは輸出する事に成るだろうと考えている筈。

ＧＥ社上層部も同様の判断を下し、ＲＲ－Ｍ１のモンキーモデルを作製と言う命令が下った。

だが、此処で問題が発生した。

正直に言って……どうやったら、モンキーモデルなんて作れるのだろう？

ＲＲＸ開発計画でＧＥ社がした事は、設計図通に部品の作製と組

み立てだけだ。
実質的には、ＥＭＬの研究開発ノウハウの蓄積が無いのだ。
此処に来て、オースティンさんとシャーロックさんに頼り過ぎていた弊害が表面化した。
ＲＲＸ開発計画中にする事が無いと言っていた研究員達は今、叫び声を上げつつ頭を抱えている。
皆がＲＲＸ－Ｍ０２と言う物を知っているだけに、お粗末な物を作る訳にもいかない。
その上、オースティンさんとシャーロックさんは現在ＥＳ－Ｘ開発計画に参加している。
余程の事が無い限りは、手を貸して貰えないだろう。

（オースティンさん！　シャーロックさん！　カンバック！）

◇

「ん？　ハワードさんの悲鳴が聞こえた様な……？　まぁ、良い

か。

ハワードさんが仕事中に悲鳴を上げるのは何時もの事だし」

第十一話　応援要請は、拒否したいな。（後書き）

頑張れハワードさん、応援“だけ”はしています。

感想待っています。

第十二話　鉄塊、空を飛ぶ。（前書き）

第十二話　鉄塊、空を飛ぶ。

１９８３年１２月上旬

試験も順調に進み、ＥＳ－Ｘ０１の完成度も次第に高まって行った。

そして、新たに新造されたＥＳ－Ｘ０１用の新しいパーツが技研に届けられた。

新たなパーツ、化学ロケットブースターである。

フレーム強度に余裕が有る為、緊急離脱用として装備する事になった。

化学ロケットブースターを背中に装着した姿を見たローズ少尉とノエル准尉は、ポツリと漏らした。

「何だかコイツ……段々強化外骨格らしく無くなって来ていませんか？」

「むしろ、小さな戦術機じゃ無いんですか？」

「否定できませんね。　色々弄っていたら、この形に落ち着いて仕舞ったんですよ」

「店長……だから、遣り過ぎだって言ったじゃないですか」

黙ってろ、クリス。

良いじゃないか、最近趣味のガラクタ弄りもロクに出来ないんだ。

偶には、羽目を外しても。

予算や設備も、国防総省持ちなんだしさ。

「取り合えず、化学ロケットブースターの動作テストをしましょう。　ＥＳ－Ｘ専用の銃器系の装備も現在開発中なので、完成しだい順次テストをして貰います」

「「了解」」

二人がＥＳ－Ｘ０１に乗り込み起動、駐機場から屋外試験場に移動を始めた。

飛行浮遊試験と言う事で屋内試験場が使えない為、以前ＲＲＸの試射に使った屋外試験場で行われる。

まず初めに、１号機が試験場中央に陣取る。

「ローズ少尉、推進剤の予備は沢山有りますから、出力は少しずつ上げて下さい。　出力調整支援プログラムが無いので、行き成りスロットルを開くと何処かに吹き飛びますよ」

「了解しました。　５％ずつ上げます」

「了解。　飛行浮遊試験開始５秒前・４・３・２・１、燃焼開始」

ロケットブースターのノズルに、炎が灯る。
盛大に噴煙をあたりに撒き散らすが、ＥＳ－Ｘ０１の巨体は微動だにしない。
そして徐々に、噴煙と噴射炎が大きくなっていく。
出力が１５％を超えた時、状況に変化がでた。
ＥＳ－Ｘ０１の巨体がその場で、浮き上がり始めたのだ。
２０％になると、ＥＳ－Ｘ０１は３０ｃｍ程度だが完全に浮遊した。

「ローズ少尉。　姿勢制御バランサーは、大丈夫ですか？　今現在ＥＳ－Ｘ０１は、完全に浮遊しています」

「大丈夫です。　バランサーに問題ありません。　ただ・・・」

「ただ？」

「推進剤の残量が６０％を切っています。　現状維持で後、１５分前後の飛行限界です」

予想通り、推進剤の消費が激しい様だ。

内臓推進剤タンクだけだと、出力１００％では3分持たずに限界と言う計算になっている。
これでもかなり効率化されているのだが、元が燃料ドカ食いと言う事も有って現状ではこれが限界である。

「ローズ少尉、高度そのままで平行移動を試して見て下さい。残量が１０％を切ったら、着陸して下さい」

「了解。　平行移動を開始します」

ＥＳ－Ｘ０１はノズルの角度を調整し、巨体がユックリと前進し始めた。
非常にユックリとした移動だが、姿勢や高度は安定しとても滑らかな動きである。
その後も特に姿勢を崩す様な事にならず、ＥＳ－Ｘ０１の初飛行は成功に終わった。

「ローズ少尉は、推進剤の補給を。　ノエル准尉、試験場中央へ」

「「了解」」

1号機と2号機が試験場で入れ替わる。
データリンクシステムを使い、一号機で採取されたデータを修正プログラムと組み合わせて、試作支援プログラムとして2号機に組

み込む。
　これで飛行制御も、１号機と比べれば少しは楽になるだろう。

「ノエル准尉、支援プログラムを起動させた。　飛行制御も楽になる筈だから、出力２０％から始めてくれ。　最終的には５０％まで上げて欲しい」

「了解しました。　出力２０％スタートで５％ずつ上げていきます」

「了解。　飛行浮遊試験開始５秒前・４・３・２・１・燃焼開始」

ロケットブースターのノズルに炎が灯る。
１号機と違い、２号機は順調に浮上し出す。
出力２０％で１号機と同じく、３０ｃｍほど浮上した。

「２０％到達、順次スロットルを開放します」

２号機はスロットルを段階的に開放していき、５０％に到達する頃には１０ｍ近くの高度に到達した。
そして２号機にも、１号機と同様に高度と姿勢の維持を優先させ並行移動させる様に指示を出す。
出力５０％では約５～６分で稼動限界に達するが、ＥＳ－Ｘ０１の動きは素晴しい。

安定した動きで、６０ｋｍ／ｈ位の速度で試験場内を飛翔する。
推進剤残量が１０％を切る頃に、２号機は着陸した。

「ご苦労様です、ノエル准尉」

「いえ。　中々興味深い体験でしたよ」

「それは良かった。　こちらも、中々有意義なデータが採取できました」

その後も順調に試験は進み、ロケットブースターのデータ採取を続行した。
そのかいもあり、採取データを修正プログラムと組み合わせた基本的な支援プログラムが完成。
今後もデータ蓄積を増やしていけば、ＡＭＢＡＣ（Ａｃｔｉｖｅ　Ｍａｓｓ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ａｕｔｏ　Ｃｏｎｔｒｏｌ：能動的質量移動による自動姿勢制御）と組み合わせ３次元起動も可能になる見込みだ。

……あれ？
何か頑張り過ぎてないか、俺？
趣味が出来なくて、ストレス溜まってるのかな？

◇

（これは……もう、強化外骨格の括りでは無い様な気が？）

ＲＲＸ開発計画関係で国防総省に出向していて、今日技研に戻ってきたのだが……。

私の目の前に鎮座する物体、ＥＳ－Ｘ開発計画で製作された機体ＥＳ－Ｘ０１を見上げる。

現在軍に配備されている強化外骨格は四角い箱を組み合わせた様な外観なのだが、ＥＳ－Ｘ０１は人に近い外観をしていた。

私見だが、ＥＳ－Ｘ０１は強化外骨格よりも第二世代型戦術機に近い印象を受けた。

研究室に立ち寄り、ＥＳ－Ｘ０・ＥＳ－Ｘ０１の実働試験映像を見て仰天した。

最早、強化外骨格の動きではない。

人間と変わりない動作を人間の数倍のパワーを持って再現し、様々なオプションを自在に操る器用さ。

データも、従来の強化外骨格を遥かに上回る性能を示していた。

その上、このＥＳ－Ｘ０１は飛行能力さえも備えている。

此処まで来ると、笑うしかない。

これが、新型強化外骨格開発計画？

馬鹿を言え、これは最早小型戦術機開発計画だ！

（オースティンさん……どうやら、私は貴方の事をまだまだ侮って居たみたいです！　貴方は本当に凄い！　貴方なら、きっと！）

◇

「あ～～～、ガラクタ弄りがしたい。もっと、趣味に費やせる時間が欲しい」

第十二話　鉄塊、空を飛ぶ。（後書き）

趣味の時間がとれず、ストレスと禁断症状で暴走しています。
微妙に自制が緩み、放出する技術レベルが上がっています。

感想待ってます。

登場メカ紹介（前書き）

登場順に追加していきます。

登場メカ紹介

◇　ＲＸ－Ｍ０　◇

１９８１年登場
Ｍ２をベースにリニアライフル仕様に改造を施した品。
口径１２．７ｍｍのタングステン製の硬芯炸裂鉄鋼弾を使用。
電磁加速と液体炸薬によって秒速２ｋｍ超の初速で打ち出す事が出来る。
冷却系は水冷式を採用。
キャパシターは一発分の容量で、充填に１分前後必要。
電源は車両エンジン直結のダイナモを回し発電する。
２０発ほどで砲身の廃熱が追い付かない様になり、射撃不能となる。

◇　ＲＸ－Ｍ０１　◇

１９８２年登場
ＲＲＸ－Ｍ０を軍用部品を使って改修して品。
水冷＋ガス冷の冷却系に変更。
加速用コイルと砲身冷却に２０秒掛かる。
エネルギーキャパシターは三発分の容量に増加。

発射サイクルは毎分3発に向上。
キャパシターを2基設置し、交互にチャージしながらの射撃ならば同一サイクルでの連続射撃が可能。

◇　ＲＲＸ－Ｍ０２　◇

１９８３年登場
ＲＲＸ－Ｍ０とＲＲＸ－Ｍ０１から採取したデータを元に、全面新設計したリニアライフル。
本体全長２０００ｍｍ・重量２５ｋｇの四砲身回転ドライブ式。
５秒に１発のサイクルで毎分１２発で発射が可能。
小型大容量エネルギーキャパシター（６発分）×２
冷却液タンク（２０？）
小型ガスタービン発電機
発電機用燃料タンク（２０？：一時間分）
総重量は１００ｋｇ近い。
キャパシターのフルチャージには３０秒程必要となる。
液体炸薬と電磁加速を併用し、弾丸を射出する。
初速：２４００ｍ／ｓ～２８００ｍ／ｓ
射程距離：５０００ｍ～７０００ｍ
装弾数：１帯１２０発（ベルト給弾）
多数の弾薬に複数の周辺機器に本体重量だけで２５ｋｇと言う、生身の人間一人での行動と運用は不可能である。

◇　試作ＲＲＸ－Ｍ０２搭載汎用輸送車　◇

１９８３年登場
ＲＲＸ－Ｍ０２を、次期汎用輸送車の試作車両に搭載したテストタイプ。
欧州戦線に実践テストとして持ち込まれ活躍。
活躍に比例し、欧州各国からの問い合わせが殺到している。

◇　ＲＲ－Ｍ１“サジタリウス”　◇

１９８３年登場
ＲＲＸ開発計画の完成品。
スペックはＲＲＸ－Ｍ０２とほぼ同等。
欧州戦線でのデータと戦訓が反映され改良されている。
現在、先行量産型が順次生産されている。

◇　ＥＳ－Ｘ０　◇

１９８３年登場

工房でクレーンやリフトの代用品として使っていた強化外骨格。技研で破棄されていた基礎フレームを拾い、工房に持ち帰りチマチマ改造したもの。

操縦系を後追いのマスター・スレイブ方式からＥＸ－ギアの先行行動筋電位観測方式に変えた。

搭載プロセッサーを増やして並列処理速度を上げた。

既存の強化外骨格を遥かに上回る追随性と運動性、繊細かつ自在に動く五指マニピュレータが売り。

第十三話　丸投げと中間管理職の悲哀

１９８４年２月中旬

ＥＳ－Ｘ０１が、一応の完成を見た。

“素体としての完成”、これがＥＳ－Ｘ０１の開発コンセプトである。

ＥＳ－Ｘ０１は戦闘に使える十分機能を有しながら、“誰にでも短期間の訓練で扱える様になる”“誰が使っても凡そ同じ性能が出る”“様々な用途に使える”と言う条件を満たしている。

事実、現在技研の一部職員もデータ取りの終了したＥＳ－Ｘ０を技研内限定で、荷物運搬用に使っている。

ＥＳ－Ｘ０に興味を持った運動神経の良さそうな研究員が“素人がどれ位で扱える様になるのか？”データを取ろうと言い出した事が発端だった。

ローズ少尉とノエル准尉の作製した訓練カリュラムが出来上がっていた事もあり、研究員は２週間程でＥＳ－Ｘ０の基本動作をマスターするにいたった。

ＥＳ－Ｘ０とＥＳ－Ｘ０１の操縦系はほぼ共通化されているので、ＥＳ－Ｘ０１も同じ結果が出ると考えられている。

そしてＥＳ－Ｘ０１の飛行テスト後に、ＥＳ－Ｘ用の銃器も順次完成しテストを行った。

・ハンドガン：１２．７ｍｍ液体炸薬・装弾数３５発。（モデル：Ｐ２２６）

・マシンガン：１２．７ｍｍ液体炸薬・装弾数３５０発。（モデル：ＭＰ５）

・ショットガン：３０ｍｍ液体炸薬・装弾数２５発（モデル：Ｍ

５００）
・アサルトライフル：２０ｍｍ液体炸薬・１５０発（モデル：Ｍ１６）
・スナイパーライフル：１２．７ｍｍオートマチック・液体炸薬＋電磁加速併用・装弾数６発。
・アンチマテリアルライフル：２０ｍｍオートマチック・液体火炸薬＋電磁加速併用・装弾数６発。
……と言う、ラインナップが揃えられた。
ＥＳ－Ｘ用銃器は、対小型種を主眼を置いて製造されている。
ＥＳ－Ｘには自在に動く５指マニピュレータがある為、実際に軍で運用されている銃器をモデルにサイズアップして製造された。
その結果、ローズ少尉とノエル准尉からは使い易いと言う評価を貰っている。

「元々軍で使っていた銃器なので、取り回しが楽ですね」

「小型種相手なら、この威力でも十分通用すると思います」

好評な理由は、他にも幾つかあった。
モデル元が堅牢な軍用銃の為、試作兵器らしい惰弱性が余り無かった事。
ＥＳ－Ｘ０１のパワーで、銃器の反動が極度に抑制されフルオート射撃においても集弾率が高かった事。
ＥＳ－Ｘ０１のＦＣＳが銃器の照準機構と連動し、照準補正を行い命中率が向上した事。
等などである。

ただし……。

スナイパーライフルとアンチマテリアルライフルの評価は二分した。

ローズ少尉は“高威力且つ射程距離も長い”と高評価を。

ノエル准尉は“高威力だが連射性に不満”と低評価を。

この意見は、ＥＳ－Ｘ開発陣営にも波及した。

曰く“ＥＭＬ仕様は止め、従来型の装備にすべき”

曰く“ＥＭＬ仕様にすれば、大型種の相手も出来る”

曰く“ＥＳ－Ｘの主目標は、小型種駆除がメインだ”

曰く“狙撃援護をメインにすれば、問題は無い”

等など、様々な意見が出された。

結局、議論の結論は出ずにＥＭＬ仕様と従来型を両方用意する事と成った。

詰る所、問題を運用側に丸投げにしたのだ。

「ＥＳ－Ｘ０１は、ほぼ完成しました。　今後は純軍事用にＥＳ－Ｘ０２の開発へ進みます」

「オースティンさん……このまま提出しても、良いんじゃないですか？」

「多分、何処からも問題は出ないと思いますよ？」

「又悪い癖が……店長って変に凝り性ですよね」

言うなよ、クリス。
俺は只、派生機を作ろうとしているだけだぞ？
標準機・指揮官機・長距離支援機・電子戦機・工作機等。
どうせ作るのなら、一度に作っておくべきじゃないか？
開発予算も余ってる事だしさ？

◇

（進まない……研究が……全然進まない）

社の上層部から製作命令が出されてから、早５ヶ月。
モンキーモデルのＥＭＬ開発が進まない。
最初頃は研究者達も素材を変えれば、性能が落ちて完成すると考えていた。
しかし、そう簡単に物事は進まなかった。

加速コイルの素材を変えれば抵抗熱で溶け落ち。
キャパシターの素材を変えれば蓄積率と放出力が極度に低下、一発分もチャージ出来なかった。
ガスタービンの素材を変えれば発電能力低下し、機材の大型化の上に１トンを超えた。

ＲＲ－Ｍ１と言う完成品が目の前にあって、この体たらく。
中間報告を上げに行くたびに、お説教が続き。
研究員に発破を掛ければ、死人の様な表情で凝視される。
ＲＲＸ開発計画の時には、考えられなかった状況が目の前にある。
そして思い出す。
ああ、本来の新規格品開発計画の現場はこんな物だったな……と。

玉に漏れ聞く、ＥＳ－Ｘ開発計画は順調極まりないらしい。
聞く度に、オースティンさんとシャーロックさんが頑張って（暴れて）いるなぁ～～と思った。
更に又、上層部がＥＳ－Ｘ開発計画に参入し様としていると聞き達観の域に達して一言。
“オースティンさん印の品は製造は出来ても、自社での新規開発は難しいですよ”……と。
彼等が余りにも簡単に新規格品を作るので誤解されがちだが、新規格品の開発なんて普通は簡単に出来ない。

（お願いですから、オースティンさん、シャーロックさん。手伝いに来てください！）

◇

「そう言えば、工房の家庭菜園ってそろそろ野菜達が収穫頃だったな。　ハワードさん達を呼んでホームパーティーでも開くかな？」

第十三話　丸投げと中間管理職の悲哀（後書き）

ハワードさん・・・敬礼。
次回も主人公は又、色々やらかしています。

感想待っています。

第一四話　ホームパーティーと農業革命（前書き）

ユニーク５万突破。

ありがとうございます。

第一四話　ホームパーティーと農業革命

１９８４年２月下旬

家庭菜園の収穫に合わせて、ホームパティーを開く事にしました。
最近仕事が忙しい事もあり、ノンビリ出来なかったので慰労を含めて知り合いを集めて開く事にしました。
ＥＳ－Ｘ０１が完成して、一息付けたのでローズ少尉とノエル准尉も誘いました。
マクレーン中尉にも一応声を掛けたのだが、ＥＳ－Ｘ開発計画の中間報告を国防総省に上げないといけないのでと、辞退された。
序に爺さんに話を振ると、即座に参加と返答がきた。
最後にハワードさんに連絡を取ったときは、色々な意味で壮絶だった。
泣き声での開発応援要請から始まり、上層への不満に研究員達への不満と１時間以上に渡る愚痴が滝の様に流れ出した。
何とか宥め透かし落ち着かせてパーティーへの出欠を問うと、とても疲れた様子で出席の意思を伝えてきた。
……ハワードさんには、お土産を用意しておこう。

「ようこそ、我が家のホームパーティーへ。　色々料理も用意させて頂きましたので、ご堪能下さい」

俺は主催者として、皆を前にしパーティー開幕の挨拶。
今回のパーティーは立食形式を採用し、料理は全て俺が作った。
一流料理人の技能データを使用し調理したので、味は保障できる。
現に……。

「うをぉぉぉ、何だこれ!?　滅茶苦茶美味いぞ!」

「あら……、本当に美味しいわ!」

「ほぉぉ、これは美味いのぅ!」

「うぅぅ……美味しい。　本当に美味しい」

「相変わらずの腕前ですね、店長」

上から、ローズ少尉・ノエル准尉・爺さん・ハワードさん・クリスの順だ。
皆の表情を見る限り、料理の味には満足そうだ。
皆夢中で食べている。
一人平然としているクリスには、バイト中の賄として何度も作ってやった事があるからだろう。

「オースティンさんが、こんな特技を持っていたなんて知りませんでしたよ？」

ハワードさんが料理を賞賛すると、皆賛同する様に頷く。

「特に、この野菜サラダの美味しさといったら絶品ですよ」

ノエル准尉が野菜を褒めてくれる。
いや～、苦労して作った甲斐が有ったなぁ。

「そう言って貰えると嬉しいですね。　この料理に使われている野菜は、家の自家製なんですよ」

「オースティンさんは、家庭菜園も持っているんですか？　工房の近くには、畑なんか有りませんでしたよ？」

良く見ていますね、ローズ少尉。
確かに、土がある畑は有りませんよ。

「工房の裏に、３階建ての倉庫がありましたよね？　アレが畑ですよ」

「「「「はぁ？」」」」

何か皆の顔が面白い事に。
あっ、クリス！
そのローストビーフ、俺も狙ってたのに。
その後結局、どう言う事だ？と言う事になり、皆で畑見学に行く事になった。

「これが家の畑です」

「「「「……」」」」

……沈黙が痛い。
あれ？もしかして俺……また何かやっちゃった？
改めて畑を見る。

青々と実った葉菜。

黄金色の穂先は重々しく頭を垂れ。

瑞々しい実を付けた果菜。

大粒の実を付けた根菜。

香り豊かなハーブ類。
様々な野菜が、元気良く育っている。

うん、問題無い。
初めて作った完全閉鎖型植物工場にしては、上手く育っていると思うのだが。
やっぱり、ギャラクシー特製の養液は効果抜群だな。
重力調整が出来ないから、大丈夫かと心配したものだ。
ギャラクシーの工場設備を完全再現は出来なかったが、２・３週間程度で収穫可能になるから上出来だと言える。

「これ……家庭菜園ですか？」

「そうですよ。　……もしかして、これは一般的ではないと？」

「「「「うん」」」」

皆が一斉に頷く。
あぁ……なにか又、嫌な予感が。
その後は皆に色々聞かれたので、質疑応答の時間となった。

Q：何時この畑？を作ったのか？
A：ＲＲＸ開発計画の時の拡張工事の序に。

Q：ここの設備は？
A：ガラクタの再利用です。

Q：空調や照明の電源は？
A：自作の太陽光発電と風力発電、後下水を利用したマイクロ水力発電。

Q：どれ位の種類の野菜が栽培されている？
A：１５～２０種程。

Q：どの位の期間で収穫が可能になるか？
A：品目によるが、大体２～３週間前後で収穫可能。

Q：コストは？
A：さぁ？

まぁこんな感じで、パティー後半は過ぎていった。
時間も経ち、パーティーもお開きになったのでお土産を折り詰めて来客者に配った。
このお土産に、特に喜んだのはハワードさん。
ハワードさんにはオマケとして、ＲＲ開発指南書を渡しておいた。
これを読み理解すれば、ＲＲ－Ｍ１クラスなら開発出来る様になる……と、思う……多分。
元は３年前に、クリスの勉強用に作製した物だし。
ハイスクールの生徒が理解出来るのだ、優秀なＧＥ社研究員なら大丈夫……多分。

「始めまして、オースティンさん。　私は、農務省の“リーラ・エドワーズ”です」

嫌な予感的中。
パーティーから3日後、招かざる客が来た。
あの～～、帰って貰えませんか？
無理？……やっぱり。

◇

（この人が噂の“ブルース・オースティン”さん。　国防総省と国務省が注目している）

彼が注目され始めたのは、大体2年程前。
技研から上げられた報告書が始まりだ。
今現在軍が配備を進めている、量産型ＲＲの元を作り発展させた人物だ。
国防総省からは、軍の戦力増強に尽力した人物として。
国務省からは、強力な外交カードを提供した人物として。
両省から注目される、重要人物だ。
しかし、彼の活動はそれだけに留まらなかった。
詳細は不明だが、今現在彼が関わっている開発計画に国防総省と国務省が共同で防諜体制を敷いているらしい。
普通では有り得ない事だ。
彼は一体何者だろうか？

そしてつい先日、国防総省と国務省が俄に活気付いた。
国防総省の同期から漏れ聞いた噂によると、待っていた報告書が上がってきたとの事だ。
一体どう言う報告書だったのだろうか？

そして今日。
私は上司と共に、副長官室に出頭した。
そこで、伝えられたのが噂のオースティン氏の事だ。
何でも彼が、画期的な農法を開発したので共同開発で実用化に向け進めようと交渉をして来いとの事だ。
その際、くれぐれも失礼が無い様にと念を押された。
本当に、彼は何者だ？

私は彼の工房にやってきた。
最近は陸軍技術研究所の方に居る事が多いそうなのだが、今日は工房の方に居るとの事でこちらに来た。
工房に入ると、奥から一人の男性が現れたので挨拶をすると彼がオースティン氏だった。
少し世間話をした後、本題の農法の事を聞くと彼は深い溜息をしつつ畑？に案内してくれた。
私は初め、目の前に広がる光景が信じられない思いでいた。
色取り取りの野菜が規則正しく並び、一面を埋め尽くしている。
その後、彼に詳しい事を聞くと更に驚かされた。
目の前に広がる光景を、２~３週間で再現可能だそうだ。
それも、年に十数回も。
副長官が、くれぐれも失礼の無い様にと言った訳が良く分かった。
確かに、これを手放すのは余りにも惜しい。
私は早速、彼に実用化へ向けた共同研究を申し込んだ。
それに対し彼はどう言う訳か、妙に疲れた感じの表情で協力要請を受諾してくれた。

（少し引っかかるが成るほど、確かに彼なら国防総省も国務省も重要視する筈ね）

◇

「また……仕事が増えた。　何に、この負のスパイラル？」

第一四話　ホームパーティーと農業革命（後書き）

家庭菜園のはずが・・・。

感想待っています。

第十五話　派生機仕様決定とお勉強（前書き）

第十五話　派生機仕様決定とお勉強

１９８４年３月上旬

面倒だったので、農業関係技術は養液の製造方法から空調や温度等の資料をエドワーズさんに渡した。
様は丸投げだ。
技術資料が有っても、実験施設を建設し実証試験を行ない安全性の確認やコスト算出をしないといけない。
多分、実用化には２・３年は掛かる筈だ。
初めは農務省に文句を言われたが、数日が過ぎるとピタリと止んだ。
エドワーズさん曰く、二対一は卑怯との事だ。
何の事だ？

まあそれは良いとして、ＥＳ－Ｘ開発計画だ。
ＥＳ－Ｘ０２基本仕様が決まった。
派生機としては、標準機・電子戦機・工作機の３機種が製造される事になった。

標準機：ＥＳ－Ｘ０１にハードポイントを増設、追加パーツと追加武装による汎用性の向上。

電子戦機：ＥＳ－Ｘ０１をベースに、各種観測装置の増設とデータリンク機能強化による部隊支援能力の向上。

工作機：ＥＳ－Ｘ０１をベースに、補助腕と装甲表面に外付け油圧アクチュエーターユニットを増設して馬力の向上。

と言うコンセプトで、派生機は設計製造される。

他にも指揮官機・長距離支援機・近接戦機・重砲撃機等と言うのも考案された。

「標準機は、少しの改良で済むので１週間もあれば完成します。電子戦機は観測機器や通信システムの追加等があるので、１ヶ月位掛かりますね。　工作機は補助腕と外付け油圧アクチュエータユニットと連動制御システムの追加に２週間は欲しいですね」

「標準機は分かりますが、電子戦機と工作機は分ける必要があるのですか？」

ローズ少尉の疑問も最もだろう。

ＥＳ－Ｘは汎用性が最大の売りだ。

「電子戦機は各種観測機器を追加搭載するので、システムの処理機能を向上させる必要も有るんですよ。　その上、ＥＳ－Ｘはジェネレーター非搭載のバッテリー駆動機なので、電源に余裕が無いんです。　知ってますか、電子機器って意外と電気食うんですよ？ＥＳ－Ｘ０１の電源のまま搭載予定の装備をフル稼働すると、１．５時間駆動するのがやっと。　専用バッテリーに追加演算ユニット、機材の冷却機器に通信ユニット。　標準機に全部搭載する位なら、専用機を作って完成度を上げた方が良くないですか？」

「えっと……確かに、専用に作った方が良さそうですね。　工作機の方は？」

「ＥＳ－Ｘ０１の駆動系は、モーターと電磁伸縮炭素帯のバイナリ式電気駆動です。　主に追随性と瞬発性を重視した構成ですね。　ただし、これには欠点もあり高荷重が掛かった状態では、駆動が極めて困難になる可能性が出てきます。　工作用と考えれば、多少動きが鈍くなっても高荷重に耐える仕様に変更した方が良いでしょう。　更に外付けにして置けば、イザと言う時にはパージして戦闘行動が出来ますからね。　補助腕は、精密作業用ですね」

「成るほど」

納得して貰えて良かった。

何と言っても、彼らには三機種ともテストして貰わないといけないからな。

馬車馬の如く働いて貰う必要がある。

それとも、追加パイロットを頼むべきかな？

「そう言えばローズ少尉、ノエル准尉。　電子機器の扱いは得意ですか？」

「いえ。　俺は余り得意ではありません。　一応、使えるって程

度です」

「私も、其処まで得意ではありません」

そうですか、そうですか。
成らば、勉強しましょう。
何、一週間もあれば立派な電子戦のプロに仕立て上げて見せますよ。

「そうですか。　では標準仕様のＥＳ－Ｘ０２が完成するまで、電子機器操作の集中講義を受けて下さい」

「「はい」」

「て、店長……。　ア、アレを遣るんですか？」

クリス……、そんなに怯える事は無いだろ？
ただ単に“集中”講義を行うだけだぞ？
昔、お前が受けた事がある講義を内容を劣化させて。

「「？」」

見ろ、クリス。
二人が不思議そうな顔をしているではないか。
何、二人が気にする事では無いですよ。
直に、そんな余裕は無くなりますから。

◇

（……分からない。　この開発指南書の内容が分からない）

先日オースティンさんの工房で開かれた、ホームパティーのお土産として譲って貰った開発指南書。
これこそ、開発が難航している研究員達への起爆剤になると思っていた。
しかし、そう都合良く事は運ばなかった。
指南書の難易度が、極めて高かったのだ。
基本の理論は世間に流れている、コイルガンの理論と同じなのだが。
指南書にはそれを元にした、独自の理論が記載されていたのだ。
その理論がこれまた、極めて高度な科学知識を基にした理論なのだと推察できる。

指南書を貰った時はこれで開発も進むと思っていたのだが、この指南書を見る限り設計図通に作っているＲＲ－Ｍ１とは、私が思っていた以上に高度な科学技術の塊だったのだと改めて思った。
大体この指南書を読み解くには、まず技術者よりも先に学者を頼

る方が良さそうだ。
何、この数式？
見た事も無いんだが？
更に本体以外の周辺機器であるキャパシターやガスタービンも、
同系列の理論で構成されている。

（オースティンさん。　これ……私の手には余りそうです）

◇

「さぁ、皆でお勉強しましょう。　何……慣れれば簡単ですよ？」

第十五話　派生機仕様決定とお勉強（後書き）

お勉強って大事ですよね？
ハワードさん……ナム。

感想待っています。

登場人物紹介（前書き）

登場順に追加します。

リーラさんを追加。

登場人物紹介

◇　ブルース・オースティン　◇

主人公　２２歳（初登場時：１９８０年）

幾多の異世界を裏方専属として転生してきた。
前回転生したマクロスＦ世界にて最終決戦時に撃墜され死亡し、何の因果かインプラントボディーのまま己の搭乗機、ＶＦ－２７γデストロイドパック装着に搭乗したままＭｕｖ－Ｌｕｖ世界のＬ５宙域付近に出現。
自分の現状を確認した後“自分が生き残る事が最優先”と言う目標を決め動き出す。
色々裏工作をした後、現在米国のとある町で工房の店主を営んでいる。
最近の悩みは、軍に目を付けられた事。

金髪碧眼の短髪、中肉中背の諜報員らしい目立たない容姿をしている。

◇　クリスティーナ・シャーロック　◇

工房のアルバイト兼主人公の助手　１６歳（初登場時：１９８１年）

ハイスクールに通う傍ら、主人公の経営する工房にて働くアルバイト学生。
手先が器用で、主人公が軽く講義した異世界技術理論を用意に理解した。
才媛と言っても過言ではない能力を発揮しているが普段の行動や言動が原因で、主人公からの印象は天然のお気楽娘と言う評価だ。
更に気が付けば、工房が国防総省絡みの極秘依頼を受注してしまった為、機密保持の観点から卒業後の就職先が凡そ決まってしまっている。

金髪碧眼のロングポニーテールのスレンダー体系、可愛い系の美人と言う容姿。

◇　ビリー・ガードナー　◇

射撃場のオーナー　７０歳（初登場時：１９８１年）

元米国陸軍技術研究所所属の退役技術中佐。
主人公が製作した試作リニアライフルを見て、軍に情報を提供。
主人公の悩みを作った元凶。

白髪碧眼の短髪、ガッシリとした筋肉質な体系。

◇　イアン・マクレーン　◇

米国軍人　２６歳（初登場時：１９８１年）

ガードナーからの連絡で主人公の元を訪れた、米国陸軍技術研究所所属の技術中尉。
主人公の製作したリニアライフルに惚れ込み、主人公の技術力に微妙な崇拝を抱いている。
主人公と軍の連絡役も担当。

ブラウンの髪に黒目の細身体系。

◇　グレッグ・ハワード　◇

ジネラルエレクトロニクス社：ＧＥ社　ＥＭＬ開発担当者　３５歳（初登場時：１９８３年）

ＧＥ社の上司に言われ契約交渉担当を拝命、色々有った後にＧＥ社のＥＭＬ主任開発担当者に就任。

主人公がＧＥ社との交渉時に、何か遣らかした事に気付いている唯一の人物。
主人公の含み笑いがトラウマ、以降は主人公に対して頭が上がらなくなった人。

眼鏡を掛けた金髪碧眼のポッチャリ体系。
主人公と出会って以来、苦労人のオーラが漂い始めた。

◇　ギルバート・ローズ　◇

米国軍人　２５歳（初登場時：１９８３年）

陸軍強化外骨格運用部隊から技研に派遣されてきた。
ＥＳ－Ｘ計画では、１号機の専属テストパイロットを担当。
ＥＳ－Ｘに惚れ込み、多少表現はアクティブだが主人公を敬愛している。

黒髪黒目で長身痩身。

◇　シャロン・ノエル　◇

米国軍人　２４歳（初登場時：１９８３年）

陸軍強化外骨格運用部隊から技研に派遣されてきた。
ＥＳ－Ｘ計画では、２号機の専属テストパイロットを担当。
ＥＳ－Ｘに惚れ込み、冷静な表面とは裏腹に内心で狂喜乱舞し微妙に暴走している。

アッシュブロンドの髪に碧眼、小柄のグラマー体型。　綺麗形の美人。

◇　リーラ・エドワーズ　◇

米国　農務省　２９歳（初登場：１９８４年）

農務省から派遣されてきた、交渉人兼新型植物工場開発計画主任担当者。
政府内に流れる噂の人物である主人公に興味がある。

金髪碧眼、巨乳モデル体型、冷たい系の美人。

第十六話　ロールアウト（前書き）

お気に入り登録９００件突破。

有難うございます。

第十六話　ロールアウト

１９８４年４月中旬

ＥＳ－Ｘ０２は無事に3機種ともロールアウトした。
各機には、ロールアウトと共に開発ナンバーが割り振られた。

標準型：ＥＳ－Ｘ０２Ａ。
電子戦型：ＥＳ－Ｘ０２Ｂ。
工作型：ＥＳ－Ｘ０２Ｃ。

現在はＥＳ－Ｘ０２Ｂのテストが屋外試験場で行われている。
ＥＳ－Ｘ０２Ｂ一号機は増設された両肩の複合レーダーユニットを展開し、広域探索を行う。
レーダ索敵範囲は、最大出力で凡そ１５ｋｍに及ぶ。
複数の目標を識別し、種別と脅威判定を行い警告を発する。
高性能化された分、パイロットの処理する作業量は膨大な数になるが軽減対策としてＥＳ－Ｘ０２Ｂには音声認識型の簡易ＡＩが搭載されている。
パイロットが口頭により命令すれば、ＡＩが自動処理し迅速な作業が可能となっている。

「２号機、９時方向・距離３０００・速力９０で3体接近中、ａ１・ａ２・ａ3と呼称。　スナイパーライフルで撃破してくれ」

「了解。　狙撃準備に入ります」

「ＡＩ、衛星リンク開始。　衛星情報とレーダー情報を照合し、目標の現在位置を精密算出。　完了次第、２号機にデータ転送」

《了解。　……リンク完了……照合完了……現在位置算出。　転送します》

「データ受信。　狙撃開始します」

ノエル准尉の乗るＥＳ－Ｘ０２Ａ２号機はスナイパーライフルを構え、１号機より転送されて来たデータをＦＣＳに入力して最終補正を掛け……発砲。

放たれた弾丸は、一直線に目標へ向けて飛翔。

数瞬後、弾丸は目標を貫き破壊した。

「こちら２号機、ａ１を撃破。　続けてａ２・ａ３を撃破します」

２号機のスナイパーライフルは、続け様に火を噴く。

数瞬後には、初めの目標と同じ様に吹き飛んだ。

それと共に、試験場内にサイレン音が響く。

「全目標の撃破を確認。　お疲れ様、試験終了です。　所定の位

置に機体を戻して下さい」

「「了解」」

指示された2台のＥＳ－Ｘは機体をハンガーに戻し、パイロット達は管制室の方に歩いてきた。

ローズ少尉がふら付き顔色が悪いが、また情報酔いだろうか？

ロールアウトしたばかりのＥＳ－ｘ０２Ｂのシステム面は、未だ未完成な部分がある。

初搭乗の時等、搭乗3分で2人とも情報過多で吐いた。

網膜投影システムに無数のウインドゥが開いて、脳が情報を処理し切れなかった為だ。

その為に急遽、俺が自作した音声認識型簡易ＡＩを搭載した。

かなり負荷は軽減された筈だが、まだシステムの最適化には時間が掛かりそうだ。

「大丈夫ですか、ローズ少尉？」

「ええ、何とか。　前に比べれば、かなり改善されています」

今回の試験は、ＥＳ－Ｘ０２ＢとＥＳ－Ｘ０２Ａとの連携テスト。

ＥＳ－Ｘ０２Ｂの観測したデータを元に、ＥＳ－Ｘ０２Ａ狙撃装備で目標を撃破すると言う内容だ。

結果は概ね良好。

実弾ＳＲ：距離３０００ｍで目標誤差＋－２０ｃｍ以内。

実弾ＡＲ：距離４５００ｍで目標誤差＋－３０ｃｍ以内。
ＥＭＬＳＲ：距離７０００ｍで目標誤差＋－１５ｃｍ以内。
ＥＭＬＡＲ：距離９０００ｍで目標誤差＋－２０ｃｍ以内。
と言う結果が出た。

「ノエル准尉、ＥＳ－Ｘ０２Ａのデータリンク観測射撃はどうですか？」

「概ね良好です。　今後ＦＣＳの性能が上がれば、データリンクのみでも命中精度は更に向上しますね。　ですが現状で確実に命中させる為には、パイロットが最終補正を掛ける必要がありますね」

「まぁ、現状ではそうですね。　ＦＣＳ成熟には、もう少しデータ収集が必要ですね」

大型や中型のＢＥＴＡ相手なら問題無い命中精度なのだが、小型種が相手に成ると少し命中精度が荒い。
最終的には、データリンクのみで＋－１０ｃｍ以内の誤差を目標にしたい。
小型種相手に今の命中精度だと、中心線上以外に照準すると外れる可能性がある。

「両機共に、完成度の向上が必須ですね。　それに比べて、ＥＳ－Ｘ０２Ｃは順調その物なんですけどね」

「ええ。　運動性は低下しましたが変りに、馬力出力がかなり向上しています」

「ＥＳ－Ｘ０１では無理だった重量物も、ＥＳ－Ｘ０２Ｃなら軽々運搬出来ますからね」

幸い、アクチュエータ連動制御システムも上手い具合に動作してくれている。
これが上手く動いてくれないと、動作その物が阻害されて立つ事さえ不可能だ。
外付け油圧アクチュエータユニットにより、ＥＳ－Ｘ０２Ｃの馬力出力はＥＳ－Ｘ０１の凡そ１．４倍になる。
高荷重状態での動作も、ＥＳ－Ｘ０１の凡そ2倍の荷重まで動作可能に成っている。

「ただ……」

「ただ？」

「何で、標準装備がスコップなんですか？」

そう、ＥＳ－Ｘ０２Ｃの標準装備にはスコップが採用されている。
工作機と言う事もあり、スコップを装備させた。

他に標準装備としては、腕部ワイヤーガンを装備としている。

「スコップは掘って良し・叩いて良し・突き刺して良しと、三拍子揃った万能器具ですよ？　工作機用と考えれこれ以上の装備は無いと思いませんか？」

「はぁ、まぁ……そうかと」

「そうですよ」

2人とも何だか、微妙に納得いって居ないようだな。
しかし、スコップは外せないな。
あれは、良い物だ。

◇

（この農法の生産性は凄まじいわね。　僅か1月で2度も収穫が可能とは……）

農務省ではオースティンさんから譲って貰った技術資料を基に、

小さな実験施設を作りました。
貨物コンテナを改造した、完全閉鎖型植物工場の簡易実験施設です。
室内を照らす蛍光灯などの人工光源。
室内の温度を調整する空調機。
室内の湿度を調整する除湿機や加湿器。
棚状に並べられた、生い茂る作物達。
そして新型農法の要、棚一杯に満たされた養液。
これらが施設の中に収まっています。

実験施設が稼動し始めて、約一ヶ月。
その間に生産された作物は2度収穫され、3度目の育成が行われています。
従来の農法の数十倍に達する生産速度。
その上、収穫された作物は各種検査を行っていますが、今の所は全く問題は有りません。
品質も、無農薬栽培の天然作物と比べても、なんら遜色は無い出来です。
寧ろ、栄養価では天然物に勝っている作物まで出てきている位です。
また味の方も、2度目の収穫時に収穫された作物を調理して研究員全員で試食しました。
感想は、美味しいの一言です。
栽培された作物を総合判定すると、極上の天然作物と比べても遜色無しでした。

ただし、問題が全く無いと言う訳でもありません。
最大の問題は、生産コストです。
この生産性を維持するには、作物にとって最適の環境を整える必要がある為、２４時間空調等の設備はフル稼働しています。

その為に光熱費等の諸経費を含めると、作物の販売価格は通常の数倍～十数倍に跳ね上がります。

（このコスト問題が解決しないと、農法の実用化は程遠いわ……はぁ）

◇

「あっ……プログラミング、ミスった。　ＡＩ基礎プログラム……ゼントラ言語混ぜて書いちゃった」

第十六話　ロールアウト（後書き）

情報酔い、経験無いですか？

感想待っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4277p/

MUV-LUV ALTERNATIVE5（改）

2011年12月24日07時03分発行